

館林市立図書館所蔵秋元家文書「公辺御問合御附札」

— 史料翻刻 —

神 崎 直 美

はじめに

ここに翻刻するのは、館林市立図書館が所蔵する秋元家文書の「公辺御問合御附札」（架号四・三・一七）である。「公辺御問合御附札」は、先に筆者が担当した『大目附問答・町奉行所問合挨拶留・公邊御問合（問答集九）』（創文社、平成二十二年二月）に収録した「公邊御問合」（東北大学附属図書館所蔵）と関連する史料である。もっとも、右の史料集は一連の問答集シリーズの一本として刊行事業が計画された。したがって、既に収載史料が決定しており、かつ頁数の制限もあったため、秋元家文書の「公辺御問合御附札」については、解題で若干（四七〜四八頁）ふれるにとどめざるを得なかった。しかしながら、その解題でもふれたように秋元家文書の「公辺御問合御附札」は、現在は確認されていない「公邊御問合」

町之部の存在を伺い知ることができる可能性を有した史料である。そこで、まず本稿で「公辺御問合御附札」の全貌を翻刻し、改めて別稿でその内容について詳しく検討を試みたい。

史料翻刻

〔凡例〕

- 一 漢字は原則として常用漢字を用いた。
- 一 変体仮名は、原則として現行の字体に改めた。但し、当時常用された江（え）、而（て）、而巳（のみ）、与（と）、者（は）、盤（は）、茂（も）、合（より）などはそのままとした。
- 一 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」とした。
- 一 誤りと思われる箇所は、原文のまま記載し、右側もしくは本文中に（ ）で註記した。
- 一 欠字は一字あけ、平出は二字あけとした。
- 一 虫損の箇所は、相当字数を□で示し、右側に（虫損）と註記した。

一 読点を打ち、人名や職名、地名などが二件以上続いている場合は、中黒点を施した。

一 原本では、各問答の目録・本文をいわゆる一つ書きで記載した後、朱筆で通し番号を付している。しかしながら、本文の番号を記した位置は、その配置箇所が乱れており、原文に忠実に翻刻すると、一件ずつの冒頭の区切りがかえって見づらいついという難点がある。それに加えて、今後の検討の便のためにも、一連の『問答集』に倣い、冒頭の目録においては、一つ書きの「一」の箇所を通し番号に置き換え、本文の一つ書きはそのまま残して各問答の冒頭に通し番号をゴチック体で施した。さらに全体の構成をわかりやすくするために、目録の冒頭に「公辺御問合御附札目録」、本文の冒頭に「公辺御問合御附札」と、それぞれゴチック体で補なった。

公辺御問合御附札

公辺御問合御附札目録

- 一 寺社吟味相拒候節之心得
- 二 鋳物師職之者心得
- 三 捨者有之節、他領引合之心得
- 四 出奔人之家族取計方心得尋日数
- 五 百姓出銭出入答申付方并差越訴仕候もの答
- 六 年貢上納金催合滞出入
- 七 調候萱之内ニ捨物有之節之取計
- 八 御奉行所ニ御仕置相濟候者領主ニ而答、并差日不参之者差越願致候者答、村役人・平百姓答
- 九 百姓響養子不熟ニ付分家
- 一〇 他領百姓及殺害候御届方
 - 一一 変死人立会検死并御関所手形
 - 一二 相宿之者ニ衣類被盜取候節取計
 - 一三 材木筏江御印之小簾建候事
 - 一四 久離・義絶之差別
 - 一五 他領引合変死人出入
 - 一六 凶作ニ付、国役金上納延伺

岡谷氏

(朱印)

岡谷藏書

(朱印)

不出門外之書

寒香園文庫

- 一七 国役金無地高除候儀御問合
- 一八 御疱瘡、二番湯・三番湯之御日取
- 一九 軽キ賭事再犯之者咎
- 二〇 聾養子不熟ニ付退去
- 二一 人を殺候乱心者、出家願
- 二二 私領以伏替普請、御代官江御願
- 二三 変死一件拘候者 公儀江差出方
- 二四 聾養子不熟ニ付、分家致候跡相続人病死之節、取計心得
- 二五 公儀ニ而一応御吟味有之候者、又者宿預等被 仰付候者死去之節取計
- 二六 聾養子不熟ニ付、出入御裁許一件
- 二七 御目見無之者者、御目見遠慮之格与申付候儀、并叱リ之上押込之刑御問合
- 二八 三ヶ津御追放之問合
- 二九 江戸御屋鋪ニ而鉄砲稽古之御問合
- 三〇 出奔人尋日数過候上、久離願取上、并女茂久離ニ相成候事
- 三一 加助郷人馬・荷物附送り、并領分統之他領ニ而人寄致候節、捕方之御問合
- 三二 家之娘ニ聾養子ニ致、(虫損ニ子カ)右養□不埒有之、永之暇被下候節、跡家族取計之心得
- 三三 国役御普請増御届
- 三四 山形松原村両駅江助馬之事
- 三五 私領江從 公儀新規土手築候事
- 三六 盜賊拵拔御仕置御伺書
- 三七 寺院本寺ノ末寺へ出寺申付、并御朱印・過去帳等、外江願申付候事
- 三八 朱座・守隨之類、役人と申紛敷者罷越候節之取計心得
- 三九 先住之借金、後住返済滞出入
- 四〇 無尽金滞出入
- 四一 所役人加印無之、家質出入証文ニ而、借金滞出入
- 四二 成就院護摩堂社中竹木出入
- 四三 長谷堂村地元之山江、御料仁位田村入会松木伐取候一件并役永之事
- 四四 出火ニ付、燒死人有之節之事
- 四五 調候査之内ニ、捨物有之節糺方之事
- 四六 盜賊押入取落候品、主出候取計
- 四七 御囲米を以、夫食御手当之御伺
- 四八 詞堂金貸付返済滞出入
- 四九 寛政九巳年八月迄之借金銀之分、御取上無之旨、從 公儀御触ニ付、御問合
- 五〇 寺院境内へ濡仏鑄建度旨願候事
- 五一 家屋鋪・田地書入金子借り請致欠落候跡、取計方之事

(4)

公辺御問合御附札

寺社吟味相拒候節之心得

寛政六甲亥年十二月、寺社御奉行御月番脇坂淡路守様江御問合申置候處、同卯年三月御附札、

御朱印頂戴之寺社吟味之節、偽等申、又者我意申募候節、呵候而禁足申付、寺院者法類江預ケ、社人者社中一統江預候而も不苦儀ニ御座候哉、其節本寺触頭江懸合等ニも不及儀ニ御座候哉、

御附札

書面、寺社吟味相拒候ハ、本寺触頭江不及御達ニ、寺院ハ法類、社人者社中江預リ申付候ニ茂不苦、且、禁足与申儀、奉行所にてハ不申付候得共、預ケ御申付候ハ、他行者不相成事ニ候、

一御朱印頂戴之寺院、手鎖、又者吟味中揚屋敷江入候節、袈裟衣取上候而茂不苦儀ニ御座候哉、是又、本寺触頭江懸合ニ不及儀ニ御座候哉、

御附札

書面、出家・社人等手鎖者不申付事ニ候、吟味之始末ニ寄、袈裟衣取揚、揚屋江遣候儀者、不苦筋与存候、尤、本寺触頭江不及達候、

一右同断之寺社吟味に詰り、他江不拘候得者、一領限ニ而仕置申付候節、其罪ニ寄脱衣致候而も不苦儀ニ御座候哉、右之節者、本寺

触頭へ懸合之上申付、可然儀ニ御座候哉、

御附札

書面、寺社吟味相決シ、他領江不拘、全御領分限ニ候ハ、御自分仕置御申付候上、身分振候程之仕置ニ候ハ、其段本寺触頭江被達可然候、尤、脱衣等御申付候而茂不苦筋ニ候得共、其科之始末ニ寄候義ニ付、極置候而難御挨拶候、

一右同断之寺社法類又者社中江預申渡候節、預リ候儀及断候ハ、手鎖等申付押込、番人等附置候而茂、不苦儀ニ御座候哉、

御附札

面書、寺社法類又者社中之者難預リ旨、及断候共、前条之通、手鎖ニ者難成、番人附置候儀者、其始末ニ寄不苦筋与存候、

卯三月

右之趣、御問合申上候、以上、

十二月九日

秋元但馬守家来

安館門蔵

右御問合御附札之写、寛政七乙卯年三月、江戸へ来ル、并左之兩通為心得、是又来ル、

私知行所信州伊奈郡南原村之内、御朱印地文永寺住寺英駿と申者、平生所業不宜、檀中一同難儀候趣、是迄折々願出候ニ付、其節々相糺候上、右英駿江茂利害申聞、以来檀中取扱方請書取之、差置候處、其後茂不宜取扱等茂有之候由ニ而、檀家惣代之者、不得止事六・七年以前、右本寺山城国醍醐理院迄茂罷出相願候處、於本寺茂右英駿江異見等差加候由、然處、此度又々檀中一同并右寺領

百姓共相凌不申願出候訳者、死人有之節取置、及延引日を重、亡者差置、施主ハ勿論隣家・組合之者迄茂日を費し、困窮之百姓とも及難儀、或盤些細之儀ニ宗判相滞、又者慮外改等致、農業差シ障等ニ相成候様之義共、其外数々箇條を以願出候ニ付、早速英駿呼出及尋候処、於役所者吟味請問敷旨申之、聊之印形等も不(虫損：差カ)出、右躰我意強者ニ而、支配筋をも相拒、其俣差置候而者、支配之詮義相立不申候、其上檀中不相治候ニ付、猶又吟味仕度奉存候、依之取扱方奉伺候、

一支配於役所吟味相拒、并筋合相分り候儀茂、印形等不差出、我俣申候節者、同宗之者江預ケ等申付候而茂、不苦儀ニ御座候哉、

一右躰、我意強者ニ御座候得者、同宗之者迎茂、一通リニ而者預り候儀、及断可申候、其節者押込置、番人等可申付候哉、又者手鎖等申付不苦義ニ御座候哉、

御附札

書面、文永寺吟味中、法類等江預ケ、又者不屈之始末相分り、其品ニ寄、実ニ難手放節者、袈裟衣取揚、入牢御申付候儀者苦候得共、手鎖難成品ニ者有之間敷候得共、是又如何之取計ニ付、先者無用之方と存候、本文三ヶ条同様之趣意ニ付、一条ニ及挨拶候、一吟味中其品ニ寄、袈裟衣取上、入牢等申付候而も不苦儀ニ御座候哉、

一同断、品ニ寄、押込・入牢等申付置候内者 御朱印地頭江預り置可申儀ニ御座候哉、

御附札

入牢御申付候共 御朱印地頭江取上ニ不及、其寺ニ差置守護可致旨、法類又者組合寺院江御申渡置候筋と存候、吟味相分り逼塞、或者押込・隠居等御申付候上、(虫損：其カ)段本寺触頭江被達可然候答不申付已前、不及掛合候、

一吟味落着之上、逼塞或者押込・隠居申付候儀、本寺触頭江不及掛合候儀ニ御座候哉、

一同断、追院申付候節者、御奉行所江御届不申上候而者不相成事ニ御座候哉、

御附札

追院等御申付候共、奉行所江不及届候得共、身分振候義者、不怪仕置故、料之次第吟味被詰仕(虫損)□□当り者奉行所江御問合被取計候方ニも可有之候哉、尤、本寺触頭江者、仕置御申付候上ニ而被申達候筋与存候、

一右寺ニ限らず、知行所内寺院乱心、或者口論之上、疵付候類之節ハ、俗人之通召捕、入牢等申付候而も不苦候哉、

御附札

寺院ニ而も乱心、或者口論之上、人ニ疵付候類者召捕、入牢御申付候ニ而茂不苦筋ニ候、

一御朱印地ニ而茂、一通リ之寺院ニ而茂、前書之通吟味之節ハ、取扱方不相替、同様ニ相心得可申儀ニ御座候哉、

子閏二月廿三日

知久監物

御附札

御朱印地ニ而茂、兼而地頭之指揮受候寺院、并 御朱印無之寺院にても、寺格重キも有之候而者、御心得ニ而勘弁之上被取計候筋と存候、

右之趣御心得、且、文永寺儀、強而地頭之吟味相拒、難洪致候ハ、一、地頭之内ニ而も、其始末ニ寄、奉行所吟味之儀、御申立候筋与存候、

子閏二月

脇坂淡路守

天明二年十月、寺社奉行阿部備中守様江伺、

一寺院吟味中入牢申付候節、三衣取上候儀、本寺江掛合ニ不及申付候ても不苦儀ニ御座候哉、

御附札

〔本寺触頭江懸合ニ不及候、

一吟味相決、其罪ニ当リ候者本寺江一通リ申達シ、脱衣此方ニ而申付候義ニ御座候哉、又者罪次第本寺へ申聞、本寺ハ脱衣為致、宗門外之者ニ致候而、領主へ請取仕置申付候筋ニ御座候哉、
右之趣、御問合申上度奉存候、

十月廿四日

中川修理大夫家来
長塩千蔵

御附札

〔吟味相決他江不拘候得者、領主ニ而御申付筋ニ候身分勤候答者、其本寺触頭江懸合之上、是又領主ハ御申渡候筋ニ候、

二

鑄物師職之心得

寛政七乙卯年二月、町奉行小田切土佐守様江御問合、

一京都真繼能登守ハ鑄物師職之許状無之候而、鑄鞴^{ツル}相立候儀者御法度ニ御座候哉、

一新鑄物師相始メ候儀者、御制禁ニ御座候哉、

一鑄物師之儀者、真繼能登守方ハ諸国相改候御定法ニ御座候哉、

一橐籥^{フイゴ}ニ而鑄物いたし候儀者、御構無御座候哉、

右之趣、御問合申上候、以上、

二月

秋元但馬守家来
安館門蔵

御附札

御府内鑄物師職之者并新鑄物師、何方ハ之許状無之候而者、橐籥・

鑄鞴相立候儀法度与申義、銘々弟子共茂勝手次第相用候、諸国之儀者如何有之候哉、御府内職分之者共、真繼能登守ハ定法請候儀無之候、

卯三月

三

寛政七乙卯年三月、御勘定奉行根岸肥前守様江御問合、

領分ニ捨物有之節、他領ニ而紛失之品之由ニ而掛ケ合有之、右捨物見出候もの并紛失之品、持主共ニ双方領主ハ相糺候處、見分候者怪敷義無之、品持主、是又相違も無御座候ハ、右捨物持主へ引

渡し、追而吟味手掛リ之儀も出来候ハ、他領引合候義ニ付、御吟味之儀申立候筋ニ可有御座哉、此段兼而為心得御問合申上候、以上、

三月十五日

秋元但馬守家来
安館門藏

御附札

御書面、居屋敷内外、又ハ持地等之内ニ捨物有之候節、持主出候者本文之通御取計可然、勿論追而手懸之儀有之節ハ、其始末ニ寄取計方も品々可有之儀ニ付、兼而極置候而難及御挨拶、且、途中ニ而拾ひ物いたし候節、其品之持主出候時之取計者、別段ニ付、其事ニ臨ミ御問合有之候ハ、可及御挨拶候、以上、

卯三月

同年同月、万年三左衛門様江御問合、

寺院他領ニ而紛失物有之、品右寺院ニ有之処、領主役人江他出届を仕、右之品を先江持参差遣候、尤、外ニ子細茂無之、全盜賊捨置候を見出候處、他出届計仕、右之品有之段不相届、密ニ先江持参差遣候、右無念を相答メ候儀者、何程之咎ニ而宜御座候哉、寺院ニ差扣等申付候而も宜筋ニ御座候哉、

御附札

御書面、寺院境内ニ有之盜物、御届も不致先方江遣し候ハ、早急迄ニ而格別之御答メニ者及申問敷、急度叱リ、又者叱ニ而相暮可仕候、寺院ニ差扣者矢張押込ニ而可有之哉、差扣与申刑、寺院ニ者無御座候、先扣ニ当リ候品者、押込ニ而相当可仕候、

四

伝左衛門殿書留写左之通、是者何之御役人江問合ニ候哉、追而取調可申候事、

一致出奔候もの家族者、同性之者之方江引取候様ニ申付可然哉、
一近キ親類方江引取候事ニ御座候哉、

右下ケ札

御書面、出奔人家族者、近キ親類方江引取被 仰付可然奉存候、然共、同性之方江引受度旨相願候者、親類共相对次第可然、何れ此方ハ訴方江被引取与巨細ニ御申付ニ者及問敷、親類共方ハ可引取旨荒々被 仰付候方可然候、右引取難渋有之候ハ、前書之通ニ而可然奉存候、土官者何茂近親引取被 仰付可然奉存候、

一出奔之家族ニ御扶持者出候儀ニ御座候哉、

右下札

一高ニ付、扶持方有之ものニ御扶持方相渡候事ニ御座候、
一 同尋之日数申付方三十日ニ而相届、又尋之義申付候儀ニ御座候哉、
右下札

一 尋之日数、土官 公儀ニ而者短、初廿日、二度目廿日、三度目三十日位ニ而落着之分有之、今少永キも有之、是者奉行所取計ニ無之候間、委細ニ弁兼候、奉行所ニ而取扱候分ハ、土官ニ而も何ニ而も、三十日宛六切、都合日数百八十日ニ御座候事、

一 但、日限之節者為御届日延申付候事ニ御座候、
一 絶交と申儀御座候哉、義絶とハ違申候哉、

右下札

絶交と申義、公儀ニ而者無御座、尤、是迄不承名目ニ而御座候、文字ニ而考候得者、義絶と違候事ハ有之間敷哉ニ奉存候、

一出生之男子・女子等有之処江、他より養子ニ参り順養子仕候積ニ而、未順養子ニ不相成之内、右他分參候養子出分仕候ハ、右躰ハ子共者如何取計可申哉、

右下札

御書面、順養子ニいたし候積り相談取極置候迄ニ而、未順養子ニ不相成内、其順養子ニ可致分申、養子出奔いたし候ハ、順養(子)ニ不相成候もの嫡孫承祖之積り御取計可然哉、併、順養子之願濟候後ニ候ハ、嫡孫承祖ニ者難相成、又候養子いたし、其養子厄介ニ御申付可然哉奉存候、是者御書面之趣、待か百姓・町人か難相弁、殊ニ六ヶ敷品ニ付、其始末委細ニ承知不仕候而者、得実御挨拶出来兼候、

五

秋元撰津守領分武州高麗郡笠幡村百姓惣兵衛儀、同村役人江相懸り貫物出入之儀、得与双方逐吟味候處、村役人共無証拠之入用錢を惣兵衛江差出候様申達候、尤、四拾八貫文余之処、内拾貫ハ証拠ニ御座候、右一件之者江答申渡之趣、左之通、

笠幡村名主

助五郎

百姓惣兵衛出入ニ付、三ヶ年入用錢高帳面差出候間及吟味候處、

取計之趣不宜、一向無証拠ニ而申訳不相立、支配百姓之儀、一体

役方之始末等閑之取計不調法ニ付、名主役取放閉戸、

附札

閉戸名目戸ノ似奇、百姓者戸ノ不申付事ニ而、百姓者刑ニ閉門茂無之候間、名主役取放シ、押込ニ而可然日数者三十日敷、五十日相立候ハ、押込赦免ニ而可有之与存候、

同村名主
庄兵衛

右同役助五郎支配下百姓惣兵衛出入ニ付、三ヶ年入用錢高無証拠ニ而申訳無之候、同役不行届候ハ、可心付候處、無其儀一同致印形等差出候段、役方等閑之取計不調法ニ付、急度呵・閉戸申付、且又入用錢之内拾貫文ハ明白ニ相分り候ニ付、惣兵衛分爲差出候、村方調物代錢者、外村役人共昼食代之儀ハ不及沙汰、向後、村方治り宜様取計可申候、

附札

急度叱り、三十日押込ニ而可然存候者、外御書面之通御勝手次第御申渡シ可成候、

同村組頭
清七

弥平次

平左衛門

弥惣治

此者共惣兵衛出入一件ニ付、入用錢之義名主助五郎取計不宜候者可心付處、等閑ニ差置候段不行届不調法ニ付、急度叱り、

附札
御書面之通ニ而可然存候、

同村
惣兵衛

此者出入ニ付、三ヶ年入用錢致吟味候處、村役人之方不分明ニ而無証拋故申立兼候、然ル上者、中山村宿式ヶ所伝右衛門方宿払、都合拾貫文ハ可差出候、尤、役人共昼食代其外出入ニ付、村調物代錢之儀者不及沙汰旨、村役人共江申渡候間、明白ニ相分り候、拾貫文ハ早々差出可申候、

附札

右同断

右同人

此者儀、当役所江願出候而事濟候義ヲ 公儀江差越訴仕、其上度々村方及出入候ニ付、蟄居申付、悴安五郎へ預ヶ可申候、

附札

親を悴へ預ヶ候儀者如何ニ而、蟄居被御申渡ニ茂不及、親類江預候間、慎方罷在旨、御申渡候方与存候、

惣兵衛悴
安五郎

此者儀、差越訴仕候段不調法ニ付、戸ノ、親惣兵衛義者段々不届ニ付、蟄居申付候、其方江預候段可申付候、

下ヶ札

戸ノ者不宜候間、三拾日押込ニ而可然候、尤、親惣兵衛者此者方ニ差置候共、夫者相対次第ニ被成、預リ主者親類共ニ而可有之候間、

其心得ニ而御申渡出御認被成候、尤、右相対次第之儀者御申渡ニ不及方ト存候、

同村惣兵衛

親類
五人組

此者共、惣兵衛并悴安五郎、右躰之差越訴仕不届ニ候、其方共兼而不和二有之候故之義ニ付、左様無之様可致旨申付急度叱り、

附札

急度呵ニ茂及間敷候、

左様無之様ニ可致候、尤、惣兵衛者、親類共江預候間為慎置、五人組共江茂心を附可申与御申渡ニ而可然存候、

右之通、答申付相当可仕哉、御問合申上候、以上、

十一月

秋元但馬守内
長山庄右衛門

六

卷上

根岸肥前守様江相伺候處、御附札有之、并進達書案御添被成、御用人を以御渡被成候、

但馬守領分之者、年貢金上納之催合与申名目ニ而、頼母子無尽発起仕候處、右金子預り候もの、江戸表江罷出居候内、出合之儀追々

及遲滞、其上病死仕候ニ付、其節証人ニ立候者江掛合候處、難渋仕内濟整兼候故訴出申候、尤、双方申立有之年数立候ニ付、右之

金子利分相嵩申候、全く無尽金ニ可有之候得共、他領之者も名前相見候ニ付、如何取計可申哉、奉伺候、以上、

附札

御書面、弥無尽金ニ候ハ、濟方之儀不及沙汰筋ニ候得共、何レ得与御糺之上ならてハ難分義与相見へ、他領引合茂有之儀ニ付、御吟味願可被成筋与存候間、別紙進達書案認進候、国郡村名等別紙書付ニ而者難分候間、進達書案江者何国何郡何村与認置候、御糺御書入可被成候、被遣候書付式通返却いたし候、以上、

甲 十二月 秋元但馬守家来 八木源左衛門

進達書案

私領分何国何郡三日町百姓甚五右衛門儀、安永三年三月、年貢納方催合金与名付候金子を、同町か何郡何村か光明寺地内佐藤利右衛門江預ケ、何村両所宮社人佐藤長太夫請人ニ相立罷在候處、翌末年、右利右衛門江戸表江罷出候ニ付、長太夫江金子段々及催促候得共不相渡由ニ而、濟方之儀甚五右衛門願出候ニ付、長太夫相糺候處、無尽金之趣ニ相聞候得とも、彼是申争ひ、右金子之儀ハ、酒井大学頭領分何郡何村宮宿村宗三郎・宗十郎茂拘り罷在、他領引合之儀ニ付、此方私方ニ而難相糺御座候間、於奉行所吟味有之候様仕度、此段申上候、以上、

(朱筆・ママ) 月

七

卷上

御挨拶書

桑原伊予守

先達而御問合有之候御領分武州入間郡柏原村永代寺屋根普請之萱を、小笠原太郎左衛門知行所同郡田中村ニ而買取引取候節、右萱之内ニ捨有之風呂敷包、萱売主へ見セ候處、不存品ニ付、人足持帰ニ候間、御糺之上衣類・麻袋等有之、松平和泉守家来神東勇藏与認候封状有之候ニ付、大和守家来江御掛合之処、勇藏者足輕ニ而同人々善光寺後町鍛冶屋七右衛門方江之書状壹通、入溝村与兵衛与申もの頼遣し、其外何ニ而茂頼遣候儀無之旨申越候趣ニ付、入溝村与兵衛領主地頭御糺御懸合、与兵衛御聞糺御申候様及御挨拶候趣を以、大和守役人江御懸合之処、入溝村与兵衛与申者ハ有之、勇藏江引合相糺候處、書状相頼候与兵衛与者人柄相違いたし候、左候得者、最初書状相頼候与兵衛ハ、入溝村与計承り、国郡領主地頭茂不承、何方之者ニ候哉難相知趣、大和守役人申越候、書面写為御見、猶又御問合、

此儀本文書状封之俣捨有之候上者、善光寺後町鍛冶七右衛門方江不相届内之儀与相聞候間、右後町之方御聞糺ニも及申間敷哉、入曾村国郡地頭等相糺候書付、柏原村ハ差出候得共、入溝村与者別段之事与相聞候間、是又御糺ニ茂及申間敷、書状者封之俣、大和守家来江御差戻シ、風呂敷包之品者捨候始末、月日・品々等巨細ニ認御領分村外レ往還端、夜ニ建札いたし六ヶ月見合尋求候もの

無之候ハ、建札取除、右品者拾ひ候者江為御取、可然哉ニ存候、
被遣候書付四通致返却候、以上、
午
六月

八

秋元但馬守領分
武州埼玉村樋遣川村
元名主

仙助

小濱町

喜左衛門新田

甚之助

鑄物町場

文六

与兵衛新田
元名主

郷右衛門

右之者共儀、加次村七郎兵衛三笠附一件御裁許之節、於当 役所
夫々被仰渡相濟候、然處領分中ニ罷在、右様之儀相拘り候者之儀
御座候得者、但馬守方ニ而も如何程之答申付可然筋ニ御座候哉、
元名主

仙助

右之者、去ル戌年中 御奉行所御呼出之節、領分役所添簡茂無之
出府仕不束ニ御座候、右之もの、如何程之答申付可然筋ニ御座候
哉、右之趣御問合申上候、以上、

附札

「御書面、仙助外四人者於奉行所吟味之上、夫々御仕置申付候者ニ

候上ハ、公儀御仕置ニ相成候者を、同様之趣意を以、猶又於領主
「答申付候筋ニ者無之候、

一仙助奉行所呼出ニ而罷出候儀ニ候得者、御領方役所添簡無之罷
出候とても、不束者有之間敷哉、併、右呼出シを不相届罷出候ハ
、叱リ程ニ而可然哉、猶御勘弁之上御取計有之候様存候、

亥四月

四月十八日

秋元但馬守家来
安館門蔵
武州埼玉郡樋遣川村
年番百姓代
弥左衛門
助

右之者共儀、去戌六月中村方出入相企、名主仙助与申者を相手
取可及出訴相巧候処、仙助承之、却而及先訴、右一件双方呼出之
節、差日不参仕、領分役所江一応之訴茂不仕、去戌ノ七月八日、
村方立去、同十二日公訴仕候処、拾壹ヶ条之内、賄賂之一ヶ条御
糺之上、疑相晴、此上願之筋決而無之段申上候ニ付、同十月六日、
於当御役所ニ御裁許被仰渡候、其後仙助義ハ、加次村七郎兵衛一
件御裁許之節、右之役御取揚被仰渡候、依之村方出入一件之儀茂
仙助役儀不相勤候上ハ、双方願之趣意茂無之旨申之候、乍併、一
同不念分事発リ、一村騒立、且、前条取計始末不埒ニ御座候、右
之もの共、如何程之答メ申付可然哉、

附札

「御書面、茂助外一人出入を企、名主仙助を相手取、品々之儀申立

及出訴候とも、於奉行所仙助役義取放シに相成、此上願之筋無之旨申立候上ハ、右ニ付答ニ者及間敷候得共、呼出之節不参いたし、其上差越願致候段ハ不埒ニ御座候間、五十日手鎖程ニ茂可有之哉、

同村元名主
仙助

右之者共儀、去戌六月中、村方出入一件茂助・弥左衛門相手取及出訴候処、右両人之者共心得違ニ而、江戸表江罷出御駕籠訴仕候処、当 御役所江双方御呼出之上、茂助・弥左衛門訴状十一ヶ条之内、賄賂一ヶ条御糺有之、去戌十月六日、御裁許被仰渡候、其後、加次村七郎兵衛一件御裁許之節、仙助義名主役御取上被仰渡候、然上ハ、茂助・弥左衛門相手取候村方一件之義、役儀茂不相勤候上者、強而相願候所存無之旨申之候、右村方一件一同相騒立候始末、其節役儀乍相勤取計方不行届不念之儀ニ御座候、右之者答如何申付可然哉、

附札

御書面、仙助義者茂助外忝人^(虫損)被相手取候ものニ候得者、村方一同致御[□]進可存様無之、不念之筋ニも相聞不申候間、答ニ者及申間敷候、

同村
弥左衛門組頭

七平
茂助組合
七右衛門

右之者共儀、名主仙助并茂助・弥左衛門出入一件ニ付、茂助・弥

左衛門、平日他所商渡世之者之内、双方呼出シ他出留申付置候処、右兩人村方立去候をも不存、役方不埒之取計吟味之上申訳難相立、且一村相騒立候始末、不束ニ御座候、右之者共如何程之答メ申付可然哉、

附札

御書面、七平・七右衛門者不念迄ニ而御座候間、急度叱リ程ニも可有之哉、

同村百姓
源左衛門
八左衛門
伊左衛門

右之者共義、茂助・弥左衛門出入一件、領分役所江呼出候節、差日不参之上、去戌七月八日、領分役所江一応之訴も不仕、村方立去リ、同十二日及 公訴候砌、行衛不相知尋中之者江致内通、諸雜用等村方相進メ、寄々取集、源左衛門・八左衛門致世話、伊左衛門を以兩人方迄相送り候段不埒之取計方、吟味之上申訳難相立旨申之候、乍併、仙助儀、加次村七郎兵衛一件御裁許之節、御取上之上者、双方願之趣意^(虫損)無之、已来右一件ニ付、願之筋無之^(虫損)申之候、右之者共、如何程之答メ申付可然哉、

附札

御書面、源左衛門外忝人者、前書茂助外忝人同様之趣意ニ而品輕候間、三十日手鎖程ニも可有之哉、

同村百姓代
三郎右衛門

都合拾七人

右之者共儀、茂助・弥左衛門出入一件ニ付、百姓共一同連印いたし、吟味之上申訳無之、且、茂助・弥左衛門始出入一件異見差扣願之筋有之候ハ、神妙ニ可相願処、其儀無之訳合茂不存、白紙連印之儀取扱驚入、惣百姓一同取戻致消印候段相違無之旨申之候得共、一同相繕立候始末取計、不埒ニ御座候、然共、仙助儀、加次村七郎兵衛一件御裁許之節役儀御取揚之上ハ、右一件双方願之趣意無之、已來願之筋決而無之旨申之候、右之者とも如何程之答申付可然哉、

附札

御書面、三郎右衛門外拾六人者、前書源左衛門外貳人ニ見合、猶又、品軽ク候間、急度叱り程ニ茂可有候哉、

附札

前書附札を以御挨拶ニ候趣、猶又御勘弁之上、御取計有之方与存候、且、御書面之内、騒立と申文談有之候而者、強訴・徒党之騒立ニ紛敷不憚唱ニ候間、茂助外壱人申勸人氣熟し候様と御直し候方ニも可有之哉存候、

亥四月

右之趣、御問合申上候、以上、

四月廿八日

秋元但馬守家来
安館門蔵

九

但馬守領分武州埼玉郡羽生町場村市右衛門後家いね、智友五郎離縁之儀、当七月中、当御役所ニ御裁許被仰渡相濟候ニ付、同郡志多見村松村佐左衛門、其外親類一同、いね方江打寄、友五郎分家之儀、度々及相談候處、彼是決定不仕候旨ニ而、別紙書付之趣申出候、如何取計可然哉、此段御問合申上候、以上、

附札

御書面、別紙書付之趣ニ候者、友五郎江分地之儀者相对相濟候得共、同人住居之儀者、いね居屋敷之内ニ致度旨、友五郎申候得共、いね居所之内ニ分家之場所無之、たとへ有之候ニも左候而者、分家いたし候姿ニ無之同居茂同様ニ付、裁許ニ不相当由申、いね不心得ニ而決着不致趣ニ相見へ申候、然處裁許者友五郎者相応手当之上可為致分家之段申渡候間、いね住居之屋敷内ニ而も、別ニ家作致宅ヲ茂別ニ立候得者、別分家ニ相当リ、裁許ニ者振申間敷、然共、いね屋敷内別家相建候場所無之候ハ、親類相談之上、相応之地所江家作、又者借宅等ニ而も可為致義ニ付、右之趣を以、いね友五郎江親類共利解申聞、いつれ共可致決着旨御申渡候方ニ可有之哉(見せ消し)、其上ニ而も強而佐左衛門彼是申、実ニ不相聞候者、いね親類共分佐左衛門を相手取、目安を以、猶又奉行所へ可願出筋ニ候、其節者添簡被成御差出可然哉ニ存候、別紙書付一通返却いたし候、以上、

亥十二月

十二月九日

秋元但馬守家来
安館門蔵

(14)

一〇

寛政五癸丑年正月八日、留之、

但馬守領分武州比企郡樋遣川村之百姓、他領信州小諸城下之紺屋源助与申者方江參候處、源助右百姓を及殺害、女房江も手疵為負、密夫之段、村役人江相届、源助出奔仕候由、右者但馬守方御用番様江御吟味願仕候而可然筋ニ御座候哉、又樋遣川村目安ヲ以願出候ハ、御用番御勘定御奉行所江添使者を以差出し而、相済可申筋ニ御座候哉、御内々奉伺候、尤、小諸城下迄四拾程も御座候得共、此方ハ茂立会见分之者、差遣相違も無御座候ハ、死骸者為引取可申儀ニ御座候哉、此段奉伺候、何方御教示奉願候、以上、

秋元但馬守内
安館門藏

正月
附札

御書面、御領分樋遣川村百姓を、信州小諸城下源助及殺害、密夫之由村役人江相届逃去上ハ、村役人を相手取、樋遣川村ハ出訴いたし可然筋与奉存候、

一 立会検使疵所等、巨細致書付を取置可然、尤、御領分樋遣川村百姓、誰ニ相違無之旨候ハ、死骸為御引取可然奉存候、尤、源助女房疵請候迄ニ而存命ニ候者密通候、答一通リ御糺可然、尤、密通いたし候段相違無之趣ニ候ハ、親類・村役人江御預ケ被置可然候、右女房ニ不限密通之一件ニ拘候か、又者百姓を源助及殺害候砌、携候者ハ御預被置可然、何ニも御用番方江大主様御吟味御

願ニ者及申間敷、御添使者ニ而月番御勘定奉行江目安為御差出候方可宜哉ニ奉存候、檢使相済候上之事ニ而可宜候、以上、

正月七日

一一

寛政五丑年正月十八日、留之、

中山郡奉行ハ檢使之儀、御関所手形之義、左之通伺申来候ニ付、檢使之儀者万年三左衛門様手形之義者、大屋遠江守様衆江御問合之上、左之通り及差図、

覚

一 立合檢使之事

御三家様 御三卿様御領知江掛候出入之儀者、右之御方様ハ出候衆者、御領知ニ而も他領ニ而も本見使^(檢)ニ相成候由、其外ハ出候分者何茂立会之心得之由、他領人交リ立会檢使之節、地元之方本檢使与相心得、他ハ罷越候ものハ、立会と相心得候由、

附札

御書面、立会檢使之儀御心得之通、御料・御三家方・御三卿方者右役人重立可申候、其外者地元之方本檢使他ハ參候もの立会檢使ニ而振儀無御座候、随分御書留之通ニ而可然候、

一 変死人仮取置候事、
一 領限変死人有之節者、檢使相済最寄江死骸仮取置申付候由、他領江懸リ候変死人有之節、立会檢使相済、是又最寄江仮取置申付置、

御届有之候而宜候哉之事、

附札

御書面、変死人仮埋之儀、御一領之御取計ニ違候儀者、無御坐候、他領入交候ニも立会檢使相濟候ハ、最寄寺院江仮埋御申付置可然奉存候、

一 変死人捨置、刃物又者所持之品等一件江拘リ候品之事、
右者、立会檢使相濟、地元村役人江願置候哉、又者変死人施主村役人江願置候哉之事、

附札

御書面、変死人捨置候刃物、其外雜物等有之候ハ、一件落着迄之間、立会檢使之上地元村方江預置候方ニ御座候、変死人之村役人江預置候義者無之候、尤、落着後者為引取申候得共、若其刃物ニ而余人坏江疵付候事茂候得者、其刃物者領主・地頭江取上、雜物者親類江引渡し候事ニ御坐候、

一 変死人仮埋いたし置、万端落着後、施主村方或者菩提寺江引取候節、途中御問所有之節者、如何取計申候哉、

一 都而御問所通手形、御留守居分被差出候哉、爰許分急飛脚等差越候節、如何取計可申哉、

右五ヶ条之趣、奉伺候、御下知被成下候様仕度奉存候、尤、右之内此度之立会先江茂申遣度儀茂御座候間、早速御下知被成下候様仕度奉存候、恐惶謹言、

正月十三日

大沼友左衛門
居判

牧野源兵衛
居判

如仰余寒強御座候得共、弥御安泰被成御座奉寄候、然者、変死人他国引取候節、御問所証文者御家来中分手形出候哉、又者御直断御座候哉ニ候段、御聞置被成度旨被仰下承知仕候、都而御問所死骸出候ニ者御役筋分手形出候得共、入候ニ者此方ニ而者先取扱相見へ不申候、先私共心得者、其変死人有之候所之御奉行様方、又者御代官・御領主様分之御断ニ而、御問所入候儀ニ茂可有御座哉与奉存候、其御奉行様・御領主様坏江茂御断振之所者、駈与相弁不申候、兎角右之様子者、其節之御振合ニ而相考不申候ハ、治定之所者難申上御座候、先有増之所御請申上候、猶御用茂御座候節被仰下候様奉存候、以上、

正月十六日

二

同年同月十八日、留之、

御領分松永村名主喜惣治出座いたし帰村候節、浦和宿星野新助申者方江泊候処、相宿之者ニ衣類、其外品々被盜取候ニ付、途中分罷帰、右之趣相届候ニ付、取計之儀根岸肥前守様御役人迄問合候處、左之通返書申来、則御届御留守居役分御同人様へ差出之、

如仰余寒強御座候得共、弥御安泰被成御座奉寄候、然者御領分武州松永村名主喜惣治儀、去ル十二日帰村之節、浦和宿星野屋新助方江一宿致候處、相宿之内勢州もの之由、忝人右喜惣治所

持之品盜取逃去候ニ付、手分いたし相尋候処、近辺墓所ニ風呂敷、其外之品捨有之、右之内上下者喜惣治品之由、外手懸リ茂無之、全前書之者之仕業之由、宿方其外江対シ申分茂無之上ハ、右喜惣治公肥前守方江届等差出候ニも及申間敷、右之趣御領主様ニ而御聞届被置、追而手懸相知候者可訴出旨被仰渡置可然哉ニ奉存候、尤、右之始末者、浦和宿支配公追而肥前守方へ御届可有之奉存候、御手前様方公右之趣御書面被成、肥前守方江御届被成候ハ、御勝手次第奉存候、右御書付御出被置候思召ニ候者、一兩日中御認、私方迄可被遣候取計置可申候、右其答申上度、如斯御座候、以上、

正月十六日

一三

寛政五癸丑年正月廿六日、留之、

但馬守武州領分公材木筏ニ組立、荒川通り江戸表江差登候節、船印同様之品、小簾建候而茂不苦儀ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

秋元但馬守家来
安館門蔵

御附札

御書面、御領分公荒川通り江戸廻ニ相成候後江、船印同様之品建候儀者不苦筋ニ存候、

右印小簾之儀 公儀御印ニ不似寄様可致旨御口達有之候、

丑正月

根岸肥前守

一四

寛政五癸丑年二月七日、留之、

久離・義絶之願書等ニ認成候處、重言之同様之儀ニ付、御留守居役江相達、公辺問合候書付、左之通、

一目下者久離卜唱候事、

一從弟同士の者、義絶卜唱候事、

一主人と親類ニ而、悴迄出候類ハ勘当、又者久離と唱候事、

一出奔致し躰を隠候者者、目上・目下之無差別、久離卜唱候事、

右、寛政五年丑二月六日、町御奉行小田切土佐守様御用人金子源左衛門江承合候答之趣ニ御座候、
安館門蔵

一五

寛政五癸丑年二月十二日、留之、

御勘定奉行根岸肥前守様江御留守居役問合候御書付御附札、左之通、

牧野周防守殿領分信州小縣郡片羽村紺屋祐助と申者宅江、去子ノ十二月廿八日、米津播磨守様御領分武州埼玉郡樋遣川村藍玉商人源蔵与申者罷越候處、同夜五ツ時頃、右源蔵を祐助宅ニおゐて手疵為負、并祐助女房江も薄手為負、源蔵逃去候処、於往還及殺害、夫公村役人宅江罷越、門口ニ而相届候者、源蔵義密夫ニ付、及殺害

候処、女房者打洩然家ニ存候旨申捨、其場分祐助義逃去候ニ付、
 敵敷尋被申付候得共、行衛相知不申候由、右源藏義、但馬守領分
 武州埼玉郡樋遣川村分相給米津播磨守様御領地江養子ニ罷越候者
 ニ付、播磨守様、但馬守方江掛合有之、三方家来立会見分之上、
 源藏死骸者身寄之者伺願引取飯埋被申付候由、然處片羽村村役人
 を相手取、播磨守様御領分樋遣川村源藏身寄之者、并但馬守領分
 同方実方身寄之者共、一同目安を以、此以後 御役所江願出度旨
 申出候ハ、播磨守様、但馬守方分添使者を以差出候筋ニ可有御
 座哉、又者三方立会見分有之候儀ニ御座候而、御用番様江御吟味
 之儀、周防守殿分被申上、播磨守様、但馬守方分同様御届被申上
 候筋ニ可有御座候哉、此段御問合申上候、以上、

二月八日
 秋元但馬守家来
 安館門藏

御附札

御書面、牧野周防守方分も問合有之候處、右領分祐助方之村役人
 取計方を、源藏身寄之者共相疑候趣も相聞候間、右之者共を相手
 取、源藏身寄之者共分目安を以奉行所江可願出筋与存候段及挨拶
 候間、源藏養方実方身寄之者分目安を以可願出旨御申聞、米津播
 磨守方御申合、両添簡を以公事方御勘定月番江御差出被成可然、
 尤、御老中方江御届等ニ者及申間敷哉ニ存候、以上、

丑二月

一六

秋元但馬守領分、当夏中時候不順ニ付、田畑共ニ凶作ニ付、一統
 難儀仕候間、去寅年、越後国川除普請国役高懸リ金、当年上納之
 義、村々甚差支難儀仕候ニ付、可相成儀ニ候ハ、来辰ノ年中ニ
 も上納いたし候様仕度奉存候、此段奉伺候、以上、

附札

御書面、国役金上納之義、羽州之義ハ外ニ一統ニ此節上納有之候
 間、右之趣、御心得御納有之候様存候、

卯十二月

松平伊豆守
 秋元但馬守家来
 長山庄右衛門

十二月十六日

一七

寛政五癸三月六日、留之、
 久世丹後守様御附札也、
 御勘定所江問合御書付、左之通、
 国役上納金取立之儀、於御料所ニ者無地高取其掛リ不申候段及承
 申候、私領ニ而茂右同様有高之分取立、無地高之分者相除候心得
 可罷在候共、此段御問合申上候、以上、

正月

御附札

書面、無地高之儀、国役金者都而不相掛ト申義ニ者無之、其訳御代官より窺之上訳立候分、不掛義有之候間、私領之分も右同様之品有之候ハ、其訳御勘定所江伺有之候方ト存候、

丑二月

御勘定所

一八

寛政五丑年四月十三日

大目付衆桑原善兵衛様江問合候處、左之通、

卷上

安館門藏様

福井嘉次馬

御手紙拜見仕候、如仰不勝之天氣合ニ御坐候得共、弥御安康被成御勤仕、珍重奉存候、然者昨日御問合被仰聞候ニ番御湯之御日取之儀、御定日与申儀も耽与無之候ニ付、御承知難及御挨拶与奉存候、橘宗仙院之御挨拶可然与奉存候、則其節之御書付返上仕候、右其答早々申上候、以上、

御庖瘡相定候日取之、

御酒湯

十二ヶ日目

御二番湯

十四ヶ日目

御三番湯

十六ヶ日目

公儀江之所、右之通、

一九

寛政五^{癸丑}年四月

公事方御勘定奉行根岸肥前守様江御問合御附札、左之通、

但馬守領分武州比企郡伊草村百姓太右衛門ト申者、去子三月中銭賭之かるた博奕仕候ニ付、糺之上過料申付候處、猶又此度式銭賭之かるた博奕仕候、右者輕キ賭銭之義ニ者御坐候得共、再犯之儀ニ御座候間、以後領分爲取締村払申付候方も可有御坐候哉、仕置之当り御問合申上候、以上、

秋元但馬守家来

安館門藏

四月廿一日

御附札

御書面、再犯候共、兩度共ニ輕キ賭之よみかるたニ候之間、所払ニも及申間敷哉、五十日手鎖程之咎御申候方ニも可有之哉ニ存候、以上、

丑四月

二〇

寛政五^丑年六月六日、留之、

御領分羽生町場市右衛門後家いね一件ニ付、先達而中山分参り候

別紙請書相添、左之通根岸肥前守様江問合候處、御附札左之通、

中山分差越候請書之写

差上申一札之事

私共出入被為蒙御吟味候處、佐左衛門の退応江遺候書状之趣、其外双方差出候書付之趣ニ而も、いね・きちと友五郎不熟之趣者無相違、友五郎義格別之不埒無之候ハ、養母いね存心ニ不相叶、殊ニ家督之儀者血筋之寅松有之、其上市右衛門儀、親類共江宛所ニ認置、遺言之趣ニも寅松を守立候ため之養子之趣認有之、養母之心底ニ不叶上ハ、可致退去儀、佐左衛門義も強而友五郎を寅松後見ニ養子いたし置度由、申分ケ難立、いね義も夫市右衛門存生之内、友五郎を養子ニいたし候積ニ而、佐左衛門致同居、市右衛門致対面候養子ニ候上者、当時後家名前ニ而、人別帳差出迎、其他之存寄ニ不応訳を以、市右衛門死後離縁いたし度由ハ、難御取用候、是又文蔵悻を寅松後見いたし候工之由、佐左衛門申上候得共、文蔵其外致相談候儀無之旨申之、無証抛申争迄ニ而難御取用候、市右衛門跡株之義、幼年ニ候共、寅松を相続人ニいたし、佐左衛門并本家長右衛門重立、其外親類共相談之上致看防百姓相続可致旨被仰渡、且、友五郎者市右衛門存命之内極置候養子ニ候間、相応ニ手当之上為致分家、きちと友五郎夫婦合離縁候ハ、寅松方ニ而相応之所江片付、親類一同和融之上可取計旨被 仰渡、一同承知奉畏候、若相背候もの御科被 仰付候、仍而御請証文差上申処、如件、

寛政三亥七月

親類年寄
いね
ね
長右衛門
文蔵

退 応
き ち
友 五 郎
兵 七

別紙本文写之通、去々亥年七月、御裁許被 仰渡候後、書面ニ而者、友五郎退可致義与被 仰渡候義ニ候所、未退去不仕罷在候間、退去申渡可然筋ニ可有御坐哉、

一同人義、市右衛門存命之時、極置候養子ニ候間、相応手当為致分家候様被 仰渡候間、後家いね并親類共何様ト申義相極メ、友五郎江申渡可然義ニ奉存候、右之通可申渡筋ニ御座候哉、

一友五郎与きち夫婦合之儀者、相对次第与被仰渡候間、右母いね大病之由難見放、母看病仕度段者不苦与申渡可然筋ニ御座候哉、

右、御裁許後、御吟味之通不熟者同居ニ付、常々家内取納リ不申、其上去ル亥年、大水砂押入、荒所有之、三反末之百姓相続無覚東旨、内々村役人申出候間、何程申渡可然哉、此段御問合申上候、以上、

六月三日

秋元但馬守家来
安館門蔵

御附札

御書面、友五郎義、退去不致候得者、裁許を不用ニ相当リ候旨、利解御申聞退去御申渡し、尤、後家いね離縁致度由者難立儀ニ付、友五郎為致別家、いね并親族共相続之上、何程与申儀為相極、友五郎へ手当之儀御申付、友五郎へも其段御申渡し、且、きち義、

母いね大病ニ付難見放由ニ而看病相願候義者、御聞届ニ而茂可然存候、為御見被成候別紙壹通、返却いたし候、以上、

丑六月

二一

寛政五丑年十一月十四日、万年三左衛門江御問合御附札、左之通、在所ニ罷在候神主乱心仕候間、座頭を切殺申候処、全乱心ニ相違無御座候、右被殺候もの、親茂神主、助命之義相願候旨、寺社御奉行江相伺候處、助命親類預ケ押込ニ仕置候、然處、此節本心ニ相成候由、寺院ハ相願候而弟子出家仕度趣願出申候、右者取揚候筋ニ御座候哉奉伺候、毎度乍御六ヶ敷、偏奉願候、以上、

御附札

御書面乱心いたし人を殺候者、此節本心ニ相成候間出家ニいたし度旨、寺院相願候とも被殺候者之親類者勿論、其者親類・村役人俱々本心ニ相成候段申立、寺院同様相願候ハ、格別、寺院計之願ニ而者難相成筋、尤、一同相願候共、元下手人之代リ押込ニ申付置候者之事ニ候得者、容易ニ者願御取揚茂六ヶ敷ものに奉存候、猶御勘弁可被下候、

二二

寛政六寅年正月七日

一 中山村以伏替之儀、御代官浅岡彦四郎様江御頼之儀、御留守居役

ハ及掛ヶ合候処、左之通返書申来候ニ付、則、紙面写シ相添、中山郡奉行江申遣之、

如仰改年之御慶、目出度申納候、弥御安全之成御越年、弥重奉存候、我者武州川崎領式拾五ヶ村、別紙之通用水以伏替之儀願出、右者先年御自分様ニ而御積立御普請出来、御給分ハ御出金有之、御料所村々茂出金之処、目録見方公儀御仕法与者相違有之哉ニ而、其節支配御代官ハ彼是掛合茂有之由御申伝候間、此節者彦四郎方ニ而世話可致義ニ可有之哉之旨、被仰聞致承知候、右者御普請所之儀ニ候ハ、彦四郎方ハ出役致目論見、御勘定所江可相同義ニ御座候、然共、用水路等御普請之儀者、十月廿日以来ニ目論見帳御勘定所江不差出候ニ者、翌夏之御普請ニ者不相成義ニ而、此節目論見差出候義者、急破之外者難取計御座候間、少々之義ハ村繕ニ而、当用水無差支様取計置、当九月上旬之内、彦四郎町役所江願出候様被仰渡可被下候、則、村方願書写し返却いたし候、右其訳、如斯御坐候、以上、

正月六日

田中善右衛門

安館門藏様

二三

寛政六寅年二月廿四日

羽州村山郡山家村卯助変死一件之儀ニ付、根岸肥前守様、御留守居役安館門藏及掛合候返書、左之通、

卷上

安館門蔵様

林運平

御手紙拜見仕候、如仰漸春暖罷成候得共、弥御安泰被成御座奉恐
賀候、然者先刻御達被申候者共、御呼出方之儀ニ付、委細被仰下
候趣承知仕候、入牢いたし罷在候もの共者、目籠ニ御入、其外之
者共ハ被仰聞候通、繩付ニ而御呼出被成可然哉ニ奉存候、右其答
迄ニ早々如此御座候、以上、

二月廿四日

二四

寛政六寅年五月二日

武州御領分埼玉郡羽生町場村市右衛門後家いね娘きち之悴寅松病
死ニ付、御勘定奉行根岸肥前守様へ問合候御附札写、

但馬守領分武州埼玉郡羽生町場村市右衛門後家いね娘きち与養
子友五郎不熟ニ付、友五郎実父佐左衛門を相手取、いね并親類共
ハ出訴仕、於当御役所いね家之義ハきち悴寅松幼少ニ候得共、血
筋ニ付名跡ニ仕、且、友五郎儀者、いね心躰ニ不叶候逆者、市右衛
門存生之内対面茂仕候事故、離縁不相成、寅松ハ相応ニ分家可仕
旨、尤、いね心底ニ不相叶上ハ、友五郎儀者退去可仕旨、きち・
友五郎夫婦合之儀者、相对次第之旨、去亥年 御裁許被仰渡候、
然處、去ル丑年五月中迄、友五郎退去も不仕、分家之儀も調不申
由ニ付、友五郎義者退去申付、分家之儀も取極候様精々申付置候

處、今以相談相調不申候内、去年十四日、右寅松病死仕候段訴出
申候、左候得者、友五郎義、分家ニ不及、市右衛門家相続可仕筋
ニ可有之哉、又者去亥年 御裁許之通、友五郎相続不相成、外ハ
養子可仕筋ニ可有之哉之旨、領分役人共申越候ニ付、此段御聞
合申上候、以上、

四月廿九日

御附札

秋元但馬守家来
安館門蔵

御書面、寅松致病死共、友五郎儀者去ル亥年裁許之通分家いたし、
市右衛門家相続者難成候間、親類共相続之上外ハ相応之養子いた
し、市右衛門家相続為致、右相続之者ハ友五郎江手当も可致筋与
存候、

寅五月

二五

一山形旅籠町之内、一ト町ニ而変死人有之、一件之内大工庄吉与申
者御差出ニ相成、一端入牢被 仰付候処、御吟味相分リ出牢被
仰付候得共、大病ニ付婦村仕度旨願候処、此後、右庄吉ハ被仰渡
之儀有之節者、右一件之内、宇吉引受ニ而御請仕候様ニ相成、願
之通婦村被仰付候、然處、右庄吉儀、病氣差重リ江戸於宿屋致病
死候ニ付、右宿屋菩提所江取置度旨、一ト町検断・元ノ役所迄願
出候ニ付、先仮埋ニ仕置候様申付置、猶又取扱之儀も可有之哉ニ
付、御留守居役安館門蔵へ申達、右御吟味御掛リ根岸肥前守様江

御問合申上候処、右躰之者、又者宿預ヶ等被 仰付候者死去之節
 者 公儀の檢使有之、或盤歸村仕在所に罷在候得者、其最寄之御
 代官所の檢使有之、若最寄に御代官無之節者、其段元の檢使有之
 上に而取置申付候、御定之由御差の旨、門藏申聞之候、
 一右庄吉儀者從 公儀檢使可有之筋に候得共、少々行違之子細茂有
 之由に付、領主の檢使遣候而、御届等茂無滞相濟候得共、御定之
 儀ハ前文之通に候、

二六

但馬守領分武州埼玉郡羽生町場村市右衛門名跡寅松病死、寅松名
 跡、

市右衛門後家
 親類いね
 長右衛門
 退 応
 き ち
 友五郎
 兵 七

右市右衛門養子友五郎離縁之義に付、志多見村佐左衛門及出入、
 去ル亥六月於当 御役所双方御呼出し御吟味之上、同七日於 御
 評定所御裁許被 仰渡候節、御請左之通、

此請書認置候旨、爰略ス、寛政三亥七月卜有之請書也、
 前書之通被 仰渡候処、相片付不申候に付、其後書面御問合申上

候處、御附札を以被仰聞候趣、左之通、

此御問合書御附札、前々認候間、爰略、丑六月卜有之御附札
 也、

右御附札之趣を以、但馬守方に而申渡候趣左之通、

一去ル亥年、いねの佐左衛門へ相掛り候出入之砌、友五郎儀、養母
 いね心底に不叶上者、退去可致義、佐左衛門義茂、強而友五郎義を
 寅松後見に養子いたし度由之申分難立旨、御裁許之御請証文有之
 候処、今以友五郎退去不致段、村役人共申立候、右者友五郎心得
 違に而、右御請証文之御文談に載有之儀を不相用者、御裁許不用に
 相当り不怪義に候間、早々退去可致候、尤、市右衛門死後離縁い
 たし度之由者、いね申分難立事に付、相応之分分可致段被 仰渡
 候事に付、是又親類共相談之上分地高相極可申候、きち儀者母い
 ね大病に候ハ、附添看病為致、いね快氣之後、友五郎と熟縁致
 候共不縁致候共、是又取極可申候、尤、分地高等相極候迄ハ、借
 宅いたし候共、実家へ罷越居候共、何にも早々退去可致筋与被仰
 渡、一同承知奉畏候、仍而御請証文差上申候、如件、

羽生町場村
 市右衛門後家
 いね煩に付代
 長右衛門印
 親類年寄
 長右衛門印
 親類文蔵煩に付
 文三郎印
 退 応印

き ち印

市右衛門名跡
寅松代

兵 七印

友五郎印

兵 七印

惣五郎印

長右衛門印

一其後寅松病死ニ付、御問合仕候趣、左之通、

此御問合御附札、前ニ認置候間、爰略ス、寅五月ト有之御附

札也、

右御附札之趣を以申渡候得共、未御奉行所被仰渡も相用不申、領主申付をも相用不申市右衛門家相統、此節難相立難儀仕候間、村役人共申立候間、左之趣、猶又御問合申上候、

一市右衛門高之内、拾分一又者拾分之式通り迄、友五郎へ分地高取極、尤、市右衛門持高之内へ割合、并借用金迄も、分地高相応ニ友五郎へ割合引請可申段申渡、きち縁談之儀も相対いたし兼候趣相聞候処、母いね存寄ニ不叶、既ニ退去も被仰渡候、友五郎ニ候迄ハ、いねとの縁者切レ候ものニも可有之哉、左候得者、友五郎分きちへ離縁状不差越候共、年数も相立候儀、旁きち方へ縁談取組不苦筋ニ御座候哉、前条之通、公儀被 仰渡も相背、領主申付をも相用不申、其去年中領分役人共今友五郎呼出し候節も屈等も不仕、何方へ被相越不罷出、旁以不埒成義共ニ御坐候、右躰ニ

御附札

七月廿四日

秋元但馬守家来
安館門蔵

者其俣差置候而者、一件領分仕置ニも相拘候儀ニ付、書面之通取極申付候而も可然筋ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、
御書面、友五郎江高分ケ之儀者、御問合之通御申渡候而も可然候得共、友五郎与きち夫婦合離別之義者相対次第、友五郎致離縁候者、寅松方ニ而相応之処へ片付候様裁許いたし候儀ニ付、退去も申渡候、友五郎事ニ候共、離縁状不差越内者、年数相立候而もきち江外分縁組者難成筋ニ候間、離縁状早々相渡候か、又者不致離縁心底ニ候哉、其段親類共今友五郎へ承取極離縁状相渡候ハ、、きちへ再望養子いたし、寅松跡株為致相統候而茂可然、離縁不致友五郎心底ニ候ハ、いね看病人も出来いたし候上、友五郎方へ引取可申儀ニ付、寅松跡相統人者相応之者早々相極、外分是又相応之縁組いたし候様、親類・村役人・五人組等へ不申渡、友五郎義御領主へ対し候不埒ハ、手鎖・過料等之相応之咎御申付可然哉ニ存候、以上、

寅七月

二七

寛政六寅年八月十三日

一追払之者、父子・兄弟御番遠慮、祖父・孫・伯叔父甥 御目見遠慮与御座候、目見へ不仕候もの者、目見遠慮之格ノ^(マ)抔と申義ニ茂御

座候哉、又者右之日数、押込ニも仕候哉、

一此度江戸表〆在所江在勤ニ罷越不埒御座候而、門前払申付、右之
父江戸表ニ罷在候、在所江持参仕候差替大小又者衣類杯、闕所ニ
相成候哉、何卒父ハ軽キ者ニ御座候ニ付、右之品々父江遣申度御
座候、如何取計申候ハ、可然哉、何茂女子事ニ而之仕置ニ御座候、
何卒御附札奉願候、

一叱リ、又者急度叱リ之上、押込ヲ申付候義茂御坐候哉、右之趣奉伺
候、何方奉願候、以上、

八月十三日

御附札

御書面之者共、押込之刑者有之間敷候、御目見遠慮之格ニ而隨
分可然哉ニ奉存候、

一闕所ニ者及申間敷、親へ家財等被下可然哉ニ奉存候、

一叱リ、又者急度叱之上、押込之刑も有之ものニ御座候得共、餘
リ多ハ無之ものニ而、押計ニ而少之軽重ハこまりに被成候も及
間敷候、

二八

寛政六寅年八月十六日

阿部豊後守様御留守居役江、安館門蔵〆問合之手紙写、

未秋暑ニ御座候得共、弥御安全被成御勤仕玆重奉存候、然者此間
此方様ニ而、先年三ヶ津御構御追放之御仕置有之様、御聞および

候趣被仰下、若右之御例御坐候ハ、其節之御届振等も御承知被

成度由ニ付、吟味いたし候処、正徳四年十二月、撰州御領分江
為在番被遣置候に、家来不届之儀有之、左之通御構御追放被仰付
候もの相見へ申候、若此儀ニ而茂可有御坐哉、是者三ヶ津より内而
とも相見江申候、夫共御届之ふり合相糺候得共、正喬豊後守様御
役中之義ニ而御届等之処、相分り不申候、若者認落シニ而も御坐候
哉と奉存候、御構場所左ニ申上候関八ヶ国、武蔵・上野・下野・
相模・安房・常陸・木曾・上総・下総・京・大坂・奈良・境^(堺)・伏
見・大津、東海道、駿州・尾州・紀州・水戸、御構御追放被仰付
候、折角被仰下候ニ付、様々吟味いたし候得共、右之外三ヶ津と
申ハ相見へ不申候、若者右之儀ニ而も可有之哉と乍遣答荒増申上
候、以上、

七月廿四日

二九

同年八月晦日

元禄十三辰六月九日、御用番阿部豊後守様江、御先代稻葉丹後守様
大御留守居御勤役中、左之通、御問合、

一於築地中屋敷、夏中鉄砲稽古為致候義、苦からず候哉、御内意承
合申候段、公用人を以御問合候處、随分不苦候得共、御成日・御
礼日、御精進日、右之方御除キ被成候方可然旨、御用人石山嘉右
衛門を以被仰出候、

右之趣、稲葉様御旧記ニ有之由、

三〇

寛政六寅年八月晦日

一 御領分者出奔・久離承届之義ニ付、中山郡奉行ノ伺申来候ニ付、
万年三左衛門様へ御留守居役を以問合候處、御附札左之通、

奉伺口上覚

一 御領分者出奔仕候得者、去年中被仰出候通り、日数尋たづね申付置候、
尋日数不満内、久離願差出候得者、是迄者承届申候、然處 公辺
ニ而者右尋日数之内者久離届難相濟、尋日数相濟願相濟、当人者永
尋被仰付候由、

一 同断、女出奔仕候得者、是又前条同様之取計御届候處 公辺ニ而
者女者久離不相成由、

右之通、申聞候もの御座候、何レ之方取計可申哉、咎無之出奔一
通り之者ニ御坐候を尋日数迄永尋被 仰付度如何と可有御坐哉、
是又、女迎も久離不相成候得者、是又当人罷在候而者、人別帳
いつ迄も除義難仕筋ニ而如何候之様ニも奉存候、右両条取計之儀
奉伺候、以上、

七月

中山郡奉行

御書面、致欠落候者尋被仰付、六ヶ月不相立内旧離・帳外相願候
とも御聞届無之方可然、六ヶ月尋相濟、弥行衛不相知候ハ、尋
被仰付候もの共、軽キ御咎之上永尋被 仰付、其後ニ至リ、旧離・

帳外相願候ハ、御聞届之上、永尋御差免可然哉ト奉存候、女茂同
様ニ而取計方ニ差別者無之、旧離・帳外不相成与申筋者無之、旧離・
帳外相願候ハ、御聞届可然哉ト奉存候、

三一

同年十月廿八日

武州御領分村々、中山道加助郷并御領分もの他領江罷越、人寄ケ
間敷風説も有之節召捕、其節右場所江罷在候者手向ひケ間敷義に
も有之節、召捕方之義ニ付、御勘定奉行根岸肥前守様江左之通御
留守居役を以問合之処、御附札を以申来候、但馬守武州領分村之
内中山道加助郷相勤申候村方御座候處、近来多分之人馬当有之、
甚因窮之村方有之候ニ付相糺候處、村数廿四ヶ村ニ而当日之前後
三・四日宛相勤、何レ日数五・六日宛相勤、惣高三千七・八百人
宛差出申候、尤、村方ニ而茂迎茂人馬引足不申候ニ付、相对を以問
屋江相頼買上人馬ニ仕、半分者人馬共ニ罷出候處、右雇錢之請取
書茂差越不申、殊ニ人馬泊錢も近来高直ニ罷成候由御座候、且又、
右御用相濟、執方割合等ニ受取書無御座候而差支候儀共御座候間、
右問屋ノ請取書不差出候者、雇錢不相渡筋ニも可有御座哉、
一加助郷被 仰付罷在候人馬被 仰付候外者、荷物多分継立候由ニ
御座候、御用限リ加助郷被 仰付候義ニ御座候哉、又者右宿江罷
出候内者、何之荷物ニ而も継立候儀ニ御座候哉、
右之趣、御問合申上候、以上、

十月九日

秋元但馬守家来
安館門蔵

御附札

御書面、問屋の賃錢請取書不差出候者、雇錢不相渡筋与申治定之儀も無之、且、加助郷者春御用筋之荷物之外、繼立候与申事三者無之、二ヶ条之趣者得与宿方江掛合候者可相分儀、其上ニ茂実ニ難心得義茂有之候ハ、宿役人を相手取可願出者格別、双方打合不相糺候而者、治定之御挨拶ニテ難及候、以上、

寅十月

但馬守領分ニ統候他領村々之内、万一人寄ケ間敷風説等茂有之候ハ、召捕可申候、其節其場所ニ居合候もの手向ひケ間敷義にも有之候ハ、他領のものたり共召捕、時宜ニ寄御奉行所へ差出候筋ニ可有御座哉、其節召捕候以後領主・地頭江案内申遣候而も可然筋と御坐候哉、博奕筋之義ニ付、先達而御触之趣茂御座候ニ付、兼而為御心得御問合申上候、以上、

十月廿八日

秋元但馬守家来
安館門蔵

御附札

御書面、廻リ之者御差出、他領ニ而も御領分者加リ候者召捕候義者、博奕賭之勝負事も限り候事ニ而、右場所ニ居合候もの手向ひ杯いたし候者、召捕先方役人江御掛合不取逃様手当之義御談置、博奕外之不届ニ付、奉行所吟味之義御申立有之可然、且、他領江御領分廻之者罷越召捕候節、若通達いたし候而者手強ニ相成候義茂有

之候ハ、召捕候上先方役人江懸合候者格別、先ッ者先方役人江懸合置召捕可然哉ニ存候、以上、

寅十月

三二

寛政七乙卯年正月十九日、万年三左衛門様へ御問合、一家之娘ニ智養子仕候上ニ而、両親共ニ相果、其娘ニ出生茂有之候ニ而、智不埒有之、永之暇遣候節、右之妻子共ニ召連立退申候儀ニ御座候哉、永之暇者 公儀之御改易ニ相当可申哉と奉存候、

御附札

御書面、永之御暇被下候ものハ、妻子召連立退可申筋ニ奉存候、然共格別之家柄等、又者年久敷も被召仕候者ニ候ハ、当人者御屋敷江立入等御差留、悴江者聊之御扶持ニ而も被下被差置候而も可然哉、是等之処、利計ニ而御取計者無之御看恕を被加候而之御取計、兎角可宜事と奉存候、

右同断、両親之内存命候ハ、両親者如何相成可申哉、尤、父者隠居仕候而存命ニ而罷在候者義ニ御坐候、

御附札

両親之内存命ニ候者、扶助米ト名付、聊之御扶持方被下、親類御預ケ被置可然奉存候、但、親類茂無之候ハ、如何様成御長屋成とも被下被差置可然哉与奉存候、
但、親類へ御預と申趣意ニ者無之、引取置と申筋ニ御坐候、

右兩条近頃乍御面倒御附札被下置候様奉願候、以上、

正月十九日

三三

秋元但馬守領分武州比企郡ヶ村組合鳥羽井村地内堤切所国役御普請所、追々出来仕候処、当月五日迄同七日迄、大風雨ニ而荒川通壺丈三尺余出水仕、右切所仮築堤百間余切所ニ罷成候共、且又、此度御仕立掛之場茂不残流失仕候由、其上本堤之義、長拾五間程切所出来、垠・樋等も損シ、領分江茂夥敷水入ニ罷成候由、高麗郡村々茂堤川除国役御普請之儀、追々御普請出来仕候處、入間川通りニ而八尺余出水仕、堤切所出来、并此度御仕立之堤茂切所欠所ニ罷成、其外破損仕候由、

右之通、出水仕国役御普請所大破ニ罷成候段、領分役人共申越候、此節、御普請中之義ニ付、此段申上候、以上、

九月十六日

秋元但馬守家来
岡本治左衛門

附札

書面倒領分国役御普請願之場所、此節追々出来いたし候處、当月五日迄七日迄之大風雨ニ而破損等茂有之候由、先達而本多中務太輔・土井大煩頭領分国役御普請・増普請之儀、御届も有之候間、此度破損場之義も御勘弁之上、御取計有之可然存候、

九月

三四

撰津守領分羽州村山郡山形松原村両駄江助馬之儀、先年松平和泉守様御代官前沢藤十郎様御支配も、時分拾八ヶ村ニ而相勤来候處、撰津守領知以來相減、當時四ヶ村ニ而相勤候得共、是迄處者困窮ニ者御座候得共、無滞相勤来候、然處、及数年其上近年御伝馬多ニ罷成、百姓ニも取統仕兼候ニ付、先年之通拾八ヶ村ニ而相勤候様被 仰付被下候様仕度旨、強而去年中相願候得共、右拾ヶ村之内ニ者 御料・私領共ニ入合有之候得者、撰津守申達候儀茂不相成事故、容易ニ難取計之趣申聞置候處、猶又此節相勤候、依之段々承糺候處、面頭仕候難義之筋ニ付、前々之通拾八ヶ村江被仰付被下候様仕度義奉存候、右願筋百姓共 御奉行所江為相願可申筋ニ可有之哉、右申上候趣を以、御吟味之上被 仰付可被下哉、此段先ッ奉伺候、以上、

三月十五日

秋元但馬守家来
長山庄右衛門

附札

御書面之願容易ニ難相濟品ニ候得共、吟味之上ならては難決候間、彌願出度旨申候ハ、四ヶ村惣代之もの御添使者を以、寺社奉行中月番江願出候方与存候、以上、

子三月

別紙之覚

山形松原村助郷之儀、松平和泉守様御代官前沢藤十郎様御支配之時分助馬相願候拾八ヶ村、左之通、

前田村 上桜田村 妙見寺村 双月村
 印役村 青柳村 長町村 志戸田村
 三河宿村^(宛) 下樫沢村 上樫沢村 若木村
 二位田村 片谷地村 南館村。飯塚村
 ○菅沢村 長谷堂村
 山形領当時此四ヶ村計ニ而相勤候、
 右之通御座候、以上、

三五

一私領之内江従 公儀新規ニ土手杯築候事、領主之役人江御達無之、
 其村役人江計被 仰付相勤候儀ニ御座候哉、
 一御料ニ込・榎有之、私領之村々右込組合ニ被 仰付、出金等従領
 主差出候様被 仰付候節、是又領主役人江御達無之、村役人江計
 御達ニ而相濟候哉、

附札

御書面御問合之趣、先達而御領分へ見分吟味ニ罷越候御普請役取
 計之儀ニ付、御問合被存候、然處、右御普請役外廻村いたし、未
 帰着不致候間、帰着次第委細相糺、追而可及御挨拶候、依之、御
 書面写留致返却候、

九月

一新規土手之儀被 仰付候得者、私領之村江悪水堪水損場ニも相成
 候、新規込・榎組合ニ相成候義茂、甚困窮之村々殊ニ年来申付来

候多、役方百姓共難儀之筋ニ御座候得共、従公儀押而敵敷被 仰
 付候上者無是非、百姓共御受印仕候、一旦御受印仕候而者、右難
 儀之訳御願ニ罷出候義相成申間敷候哉、百姓共江御達有之義を、
 領主役人へ申立候筋茂可有御座哉、取計如何相心得可申哉、
 右之通相伺候様撰津守申付候、此段申上候、以上、
 八月廿八日
 秋元但馬守家来
 長山庄右衛門

三六

覚

私領分羽州山形城下町屋家中共ニ於所々致盜賊候もの有之難儀仕
 候ニ付、兼而城下之者共へ申付置候處、盜賊見出候間、足輕差遣、
 町人とも案内ニ而召捕吟味仕候處、町家江も盜ニ入候處、被見咎
 逃去、夫の家来之者差置候長屋・土蔵江忍入、盜仕候由、家来之
 者再応吟味仕候處、無宿ニ而盜賊ニ紛無御座候段、白状仕口書取
 置申候、

召捕候盜賊

下野国阿州村金堀作四郎
 悴 無宿

庄七
 当巳三拾三歳

右庄七儀、式拾年以前下野国阿州村親之方欠落仕候由、右下野国
 阿州村者御代官所之様ニ相覚申候得共、御代官名前も覚不申候由
 申候、夫の所々徘徊仕、其後私領分へ罷越、衣類等ふと盜取候段
 白状仕候ニ付、入牢申付候處、牢を破り逃去候ニ付、又候召捕差

置申候、

附札

庄七盗いたし候始末得与遂吟味、他所之引合無之候ハ、自分仕置ニ被申付候、

右之通ニ御座候、如何可仕候哉、奉伺候、以上、

九月三日

秋元撰津守

三七

寛政六寅年七月

一織田左近将監様御領分天童仏向寺ノ末町御城下三日町正明寺・小
白川村西光寺、両寺共ニ寺法背候由ニ付、出寺申付候処、右両寺
寺法相背義無之旨、出寺之儀不致承知、依之本寺仏向寺ノ役僧を
以、正明寺・仏向寺へ申達、并双方ノ寺社役所江差出候一件書付、
都合拾壹通写寺社方ノ伺書老通相添差出候ニ付、則差越申候、右
始末之内、正明寺・西光寺伺書ニ本寺ノ申付ニ者有之候得共、御
朱印過去帳印形之義与難相渡之旨、及答候得共、猶又相伺候旨、
爰元寺社役所迄伺候間、寺社奉行相答候者 御朱印者大切之儀、
殊ニ先達而 公儀ノ御朱印御渡之節茂、御城下寺社江者從 此方様
御渡被成候義ニ付、卒示ニ難致差因 公儀寺社御奉行所へ御問合
之上、何レ共可致差因候間、夫迄者相渡候義、御無用可仕旨、正
明寺・西光寺へ申聞候段、并仏向寺役僧寺社役所江罷出候節も、
右之趣ニ相答旨、寺社奉行申聞候、然處、此度右出入ニ付、仏向

寺及 公訴候段、爰元寺社役所江も相届候、弥及 公訴候者、前

文之 御朱印并過去帳印形等之儀も 公儀御奉行所ニ而御糺も有

之御下知可御座候得共、若爰元寺社役所江右挨拶承度旨、仏向寺

ノ申来候節之心得ニいたし度候間、御朱印・過去帳印形之義ニ付、

正明寺・西光寺ノ伺之趣、如何取計可然之旨、寺社奉行伺申候、

依之公儀御振合御問合被仰聞候様致度存候、

右之趣、山形ノ申来候ニ付、万年三左衛門様江御留守居役問合候

處、左之通申来ル、

天童仏向寺ノ 御城下三日町正明寺外ヶ寺、寺法相背候由也、

一件御内御相統ニ付、御書付共一覽仕、私存念左ニ申上候、

一仏向寺ノ御役所江差出書付之内ニ、出寺申付与有之候、

此出寺与申者、如何申付候事ニ候哉、本寺之申渡等聊違背仕候連、

本寺ノ退院等容易ニ可申付筋ニ者有之間敷哉、出寺与申者退院之事

ニも候哉、御役所ニ而出寺之訳仏向寺へ被成御尋候上、書付御請

取被置可然筋ニも可有之哉ニ奉存候、併、一旦御請取被成候上ハ、

今更御差戻も相成申間敷哉ニ付、出寺与申訳一応御尋被成候上

ニ而、退院之事ニ候ハ、右書付御差戻御領主織田家江御懸合も

成候方ニ可有之候哉、

一御朱印・過去帳等、外末寺之内江預候様、正順寺江仏向寺申渡候

一件、此義縦令如何程大病相煩候とも、住職いたし罷在候僧之内、

檀家へ御朱印守護申付、過去帳外末寺へ可相渡筋者有之間敷、本

寺ニ候連末寺之 御朱印杯我俣ニ可取計筋者有之間敷、病氣中死

亡之者有之候ハ、定而隣寺、又者組合寺院を頼、葬式等執行可申、又者看主も有之候ハ、看主諸事可取計事と奉存候間、当住罷在候内者、病氣等ニ而御朱印を他之者江守護申付、過去帳を外寺院江可相渡筋者有之間敷筋ニ御座候間、何程申聞候共、仏向寺申渡ニ而御朱印を檀家江守護申付、過去帳外寺院へ預候義者難致旨挨拶仕候而可然筋与奉存候、正明寺へ御申聞可然奉存候、右之通ニ者御座候得共、一躰本寺江州蓮花寺も拘之筋も有之候哉ニ相聞候所、本寺仏向寺申渡を、正明寺外壱ヶ寺相背候品、法義之事ニ候共不相分事茂無之ものニ候處、何々之事相背候哉、此度之書而已ニ而者、難分哉ニ奉存候間、今一応得者正明寺御尋被成候上、仏向寺申聞候趣を以、寺社奉行衆へ御問合御取計可然哉、宗旨何ニ候哉、是等之処も不相知候而者、奉行所ニ而も御挨拶等出来兼可申与奉存候、

但、織田家へ此方ニ而御内々御懸合御取鎮候方ニも可有之哉、可奉存候、

私覚右訳者、仏向寺為代僧長崎村満願寺、長町村称念寺・慈恩寺・山内宝徳寺、右三ヶ寺正明寺江罷越候處、正明寺病氣ニ付、檀中為惣代三日町長吉与申者差出及掛ヶ合候處、三ヶ寺申聞候者、先達而登山可致旨申達候處、病氣ニ付登山罷成兼候段申遣候ニ付、病氣全快迄寺附之過去帳、并正明寺印形者称念寺へ被渡御朱印者正明寺檀中江預ヶ守護可仕之段、代僧申渡候、右三ヶ寺不被越以前ニ出寺申付候段ハ、仏向寺へ申來候、

三八
寛政七乙卯年

一 御勘定奉行御支配朱座役人之由申之、飛田庄次兵衛与申者、去ル四月中当所旅籠町ニ旅宿致居、十日町黒木屋吉右衛門呼候様申候得共、城主役人江御掛合之上差図無之候得者、難相成旨宿源治申述候處、太右衛門方へ自身罷越拔朱之由ニ而、朱墨式挺封印いたし、組合江預リ置可申旨申候得共、組合之者共預不申、左候者檢断へ懸掛拔朱墨調候義相違無之趣、書付取可申旨申候得共、是又書付差出不申、庄次兵衛当所者出立仕候、右御用筋ニ而罷越候由ニ者申候得共、先触も無之、公儀御役人中之御証文茂持參不致疑敷者ニ奉存候ニ付、以後心得之ため左之通窺書山形町奉行差出候間、江戸へ申遣候處、則、万年三左衛門様へ御問合御附札左之通、一 公儀御役人之由ニ而吟味等之儀申聞候共、江戸表へ御沙汰無之内者、其所へ留置御沙汰相待可申哉、

御附札

一 公儀役人之由ニ付、吟味筋有之呼出候段、於彼地御領分御役人江掛合之上呼出候者、江戸表へ御沙汰無之候共御差出可然、右躰之役人者是非御老中方御証文欵、御勘定奉行之証文を持參リ、人馬遣候義ニ而、先触も無之參候者ハ無之、真似者直ニ相分リ可申候間、疑敷もの者其所江留置、其筋へ御問合之上、呼出之ものハ差出候方与存候、

一 公儀御普請役、其外御役人遠国へ被罷越候御方者、何御役之御支

配下ニ御坐候哉、

一公儀御役人之分、何御役遠国へ被罷出候哉、尤、遠国へ被罷出候節、御老中様方御判、又者其頭之判ニ而茂持、他所通行被致候哉、

御附札

「遠国江於御役人何役之支配ト限リ候義者無之候得共、多分御勘定奉行支配、

御普請役

評定所出役地役
御代官手代

右式役重モ被在出したし候、御普請役者御老中様かた御証文、御代官手代者公事方御勘定奉行証文を以通行いたし候、其外一通之御代官手代も吟味ニ罷越候得共、是非先触を以通行致候、

前書二役之外、

御小人目付 御庭方 町同心

右役義出候得共、是者隠密ニ罷越候事故、権柄等成もの者有之間敷候、御小人目付者 御老中方御証文ニ而參候事ニも有之候、

一朱座今改役人差出拔朱墨等吟味仕候哉、又者 公儀今御役人被差出、右御改有之候哉、尤、右御改有之節者、御役人不被差出候以前、公儀今御触ニ而も出候哉、又者御触も無之不時ニ御改有之候哉、

御附札

「朱之儀者朱座、外之脇朱売買致問敷旨之御触者、兼而有之儀ニ而、拔朱売者決而致問敷事ニ御座候、然共、拔朱為吟味改を出候得共

公儀役人之ことく可被抜筋ニ者無之、縦令拔朱売買致候者ニ候共、其改之役人旅宿杯へ呼出候共可差出筋ニ者無之候、併、似セ朱見届候上、其品預ケ候ハ、預リ之書付者出候方可宜候、右者朱座今御勘定奉行へ申立、御吟味ニ可相成義ニ而、朱座限リ之吟味ニて不相成候間、御勘定奉行之呼出を相待可然候、尤、右改役人者不時ニ出申候、

一公儀今都而御吟味事有之節者、城主江御達も無之不時ニ 公儀御役人、其城下、又者領分中在々杯之者、其城主役人江も無斷其所之者御吟味御座候事も有之候哉、

御附札

「公儀之吟味ニ而三奉行之内差紙を以呼出候もの者、領主江不掛合候得共、其外之役所、又者其所江役人罷越、在町之者呼出之節者、領主役人江懸合之上、呼出候事ニ而、無斷呼出候義者無之候事ニ候、一守隨義者 公儀御紋付御幕、他所出秤改之節打候儀も御座候哉、前々秤改之節 御紋附御幕打候儀及承候間、為心得右之段存知居申度候、

御附札

「守隨秤改之節 御紋付之幕打候義者有之間敷事ニ御座候、奉行所或者関所杯ニ而御紋付之幕者打不申、是ニ而諸事相分リ候事と存候、一ヶ条を以奉伺候、御証人御判等も無之紛敷ものニ而、かさつ成義も御座候者、公儀御役人と申候とも召捕候テ茂不苦候哉、

御附札

公儀役人と申候共、一鉢之始末疑敷候ハ、其所江留置、番人附置、其支配役人江懸ケ合取計可然候、かさつ成事いたし候ハ、召捕候而も苦ケ間敷候得共、先々穩便ニ和らかに取計度ものニ御座候、其上ニも手ニ餘リ候ハ、召捕、一間江押込置、其筋江御問合之上、夫々御取計可然、容易ニ繩杯掛ケ候義者致間敷、真似者早速相分リ可申事ニ候俟、初発者念を入候方可然候、

六月

三九

寛政七乙卯年

一御城下小姓町明善寺寺、同宮町成就院江掛リ金子出入、并万年三

左衛門様御存寄書左之通、

備用申金子之事(借)

一金五拾両也、但、文字志歩判ニ而利足之義ハ志ケ月ニ金式拾兩ニ付志分

右者、其元寺志導金、自寺要用ニ付、備用仕候処、(借)実正明白也、

返済之義者当十一月寺料年貢取納、米以売代借用金江加利足、急度相済可申候、右聊相違於有之者、請印拙僧とも引受無相違返済可仕候、為後証仍如件、

寛政六甲寅五月

借主

成就院印

明善寺村請人
妙観寺印
鉄砲町口入世話
来呼院印

小姓町金主

明善寺

前書之通、当寺要用ニ付、備用致候上考、寺料年貢米相払無相違相済可申候、仍如件、

成就院役僧

同 実相院印

同 義観印

同 尾形秀蔵印

以書付御答申上候

一去秋七月中死去いたし候当寺先住盛音江、小姓町明善寺寺金子用立置由ニ而、当七月中寺拙寺へ催促ニ候得共、返金之義拙僧任存慮兼候趣左ニ奉申上候、

一右金子証文加判人之内、実相院事、去夏四月中致出府留守中ニ御座候事、

一威徳寺留守居義観と申者、当寺役掛リ之僧ニ無御座候事、

一右証文、当寺蔵米書入之處、秀蔵与申者知行高掛リ役ニ無御座候事、

一御公儀江当寺住職継目之節、借財等致寺附ニ間敷旨、証文差上候事、

一借財等致寺付ニ間敷旨、真言一派之掟ニ御座候事、
右申上候訳柄、就中成就院者談林職ニ御座候得者、会下門末之制務も可仕録職ニ而、右鉢之義引請取量候而者、一派之掟難相立、

別而 御公儀江有進候事ニ御座候、早竟当寺内縁之族、内々ニ而等

閑之証文取繕置候始末無覺束奉存候、何分御糺明之上、速ニ相濟候様、御威光奉希候、尤、今程当寺江掛リ之義致落着候ハ、右秀藏義、寄其筋仕置可申付候、右御答申上候通相違無御座候、以上、

両所宮別当
成就院印

寛政七卯年九月

寺社
御役所

右出入相滞候ニ付、寺社方々伺書差出候間、書付取揃御問合也、
私覺妙現院者
他領寺院也

万年三左衛門様御存寄書左之通、

都而貸金銀米之出入訴出、双方貸借ニ相違無之段申立候共、是非其趣之御書を取り、利足式拾兩壹分ハ高利ニ候ハ、式拾兩壹分ニ直し、滞月丈取金江加へ、三十日限り濟方申付、日限りニ相濟不申候ハ、金土寺ニ応シ切金ニ申付日を極置、壹ヶ月ニ壹度宛取遣可為仕義ニ御座候間、当人死失等いたし濟方可致もの無之候得者、証人江濟方申付候得共、死失も不致、又者跡身上引受之者も有之候得者、証人等糺ニ者、又及ものニ御座候、

一 詞堂金茂通例之貸金取扱ニ御座候而、切金物ニ御座候間、明善寺預候金子も始終者切金ものニ御座候、

一 先住之借財、後住不引受者、真言一派之掟と申訳も有之間敷、縦令真言之掟ニ候共、公儀ニ右躰之御法を立被置候義ニ無之上ハ、

公辺沙汰・御領主沙汰ニ相成候ハ、真言之掟者立申間敷恐候事無之候、然共、先住自分之借金者、後住引受可申筋者無之、真言ニ限リ候事ニ者無之、諸宗共ニ同様ニ御座候得共、寺附之借用者後住引受可申筋ニ御座候、然処、此度之一件証文之面ニ者自寺要用ニ付、借用与有之、寺附之借金借用証文ニ御座候得共、秀藏差出候書付ニ者盛音法印私用ニ借用いたし候旨有之、左候得者我物之借用故後住引交ニ可申付筋ニ者無之、併、証文之面ニ自寺要用与有之候得共、明善寺者私用之訳不存哉ニ御座候間、濟方難申付とも被申間敷、依之妙觀院証人之義ニ候得者、同院を呼候打合吟味無之候而者、何共濟方之訳聞兼候處、平岡彦兵衛支配所之寺院ニ候上者、打合之御吟味相成間敷候間、其趣明善寺へ申聞添簡可遣候間、出所可致旨御申聞、訴状差戻之方ニも可有之哉、一躰者御吟味願ニ而宜ものニ御座候、

十月

四〇

天明九酉年正月来状

一 八木源左衛門申聞候者、本多豊後守様御留守居無尽金之儀ニ付、御留役甲斐庄武助様江御問合申候趣写取候由ニ而、心得ニも可相成哉与差出候間、其元ニ而も御心得ニ茂可相成哉与写差越、懸御目申候、尤、右附札之趣御私領限リ之出入之節之心得ニ相成義与被存候、他領引合御座候得者、先達而根岸肥前守様今御差図之通取

計候義与奉存候、此段為御心得申進候、以上、
右、勘兵衛・九右衛門方四郎左衛門・伝左衛門方へ申来、

別紙写左之通、

天明八申年十二月、御留役組頭甲斐庄武助様へ御問合御附札左之
通、

領分百姓・町人之内、無尽取立、右連之内百両手取返し金仕候筈
之処、追々式・三拾両も滞、講元方及催促候得共、難渋之趣二而
懸合不仕候、尤、金百両請取候節帳面江受取印形仕候由、

右、無尽之外、当鬮之節懸返し金不足之分、講元方相弁候儀二可
有御座候哉、懸返し金不残もの方為差出候義二可有御座哉、

一 右躰之儀、在所役所江訴出候而も無尽相对之儀不取上筋二可有御
座哉、此段御内々御問合申上候、以上、

申十二月

本多豊後守家来
大生源吾

御附札

御書面無尽者相对之儀二付、講元連中兼而之極、又者対談次第、
取济方定法も無之候、尤、右躰之義、御領主役所江訴出候ハ、
無尽者仲ヶ間事二付、証文憶取候者、相对二而可济者格別、御取上
難成旨御申渡、吟味裁許等之沙汰二不及筋二候、奉行所江願出候
而も、取上不申事二候、以上、

申十二月

四一

寛政八丙辰年三月

爰元御城下町家之者、家屋敷書入二いたし、外町家之者方金子致
借用候処、他借多二而身代沽却二及、家屋敷売払、借金分散に相
成候處、家屋敷書入二為致候、金子右分散を承知不致、家屋敷売
払代金を押置候二付難儀之由、借主方訴出申候、依之家屋敷書入
証文為致吟味之處、所役人加判無之証文二而御座候、右之通、所
役人加印無之、書入之借金者相对之儀二付、書入無之借金二准、
济方申付書入之品者金主江不相渡筋二可有之哉、又者所役人加印
無之候共、書入取置候金主江、書入之品売払代金之内、借金并利
金共二為致返济候筋二可有之哉、

一 右書入之品二付、所役人加印無之候而も、取捌之差別可有之哉、
たとえは家屋敷書入と商イ紅花・蠟などの書入とは、所役人加印
之有無違候様二も被存候、右之趣、及御問合申候、
公辺之御取捌者、如何御座候哉、何方乍御面倒被仰聞候様致度存
候、尤、双方共二御城下町人共二御座候、

右之通、四郎左衛門・十郎左衛門・源左衛門方方、文左衛門・伝左
衛門・左七方へ申越候處、御附札左之通之由、同五月九日出、右三
人方方申来之、

御附札

御書面、家屋敷書入二いたし候節之証文二、所役人加印も無之、
殊二他借多二而身上分散致候由、家屋敷売払候を、其代金出入二

取候もの押置可申筋三者有之間敷候間、外ニ金主同様分散可請者
 格別、家屋敷売代金押置可申筋三者無之段御申渡、勿論分散不心
 得ニ候共、無頓着分散可受旨申候者江計、家屋敷・家財売払、代
 金分散割合相渡、今般之分散不得心之もの共江者不相渡、追而身
 「上殘立次第可相掛旨御申渡可然筋ニ奉存候、

一家屋敷書入者、商ひもの書入を取捌之差別者、証文次第之儀ニ付、
 治定之御挨拶難致、併、家屋敷書入之証文ニ所役人加印無之者、
 商ひ物書入も同様ニ而差別者無之、通例之借金出入取捌ニ而振候筋
 者有之間敷存候、

此御附札は、万年三左衛門様欵、

四二

安永四未年、山形宮町両所宮別当成就院、并護摩堂社中竹木伐取候
 出入、寺社御奉行太田備前守様江御問合、并御附札左之通、

拙者領分羽州山形鳥海・月山両所宮、此度仁王門致再建候ニ付相
 除候立木者伐取、尤、用立候木者社用囲置申度旨、右別当成就院
 并如法堂・護摩堂・内御堂、其外社人一派ニ相願候處、未木枝葉
 等者、前々之通成就院方江引取候段申候由ニ而、護摩堂申候趣者

御朱印ニも社中竹木諸役免除与有之上者、成就院方江引取候而者、
 御免除之筋立兼候間、拙寺江被下置候而御免除之筋立候様いたし
 度段申候故、成就院相聞候處、不依何事別当方ニ而引請枯木有之
 候節者、人足等差出用立候分者、社用ニ囲置不用之分は、只今迄

別当方江取仕舞成候間、未木枝葉ニおよび候而者、何方江も遂相談
 候所坏無之段申候故、護摩堂相尋候得者、倒木等有之候而茂、先
 年公事以来者何方江も先住代合片付不申捨置申候由申聞候、又候
 成就院申候者、先年公事以来者枯木倒木有之候節者、三寺之筆頭
 江遂断、年行事・月行事立会候而、木者秋用ニ囲置、未木枝葉者別
 当方江取納申候、宮普請入用出錢割合帳面ニも、別当三寺社人印
 形ニ而、双方致所持候得者、倒木捨置不申証拠ニ而御座候段申聞候、
 社人江茂相尋候處、未木枝葉者別当方へ取納成候段申候得共、社
 人者成就院 御朱印之内故、右之通申候旨、護摩堂申之候、
 右者、延享二年御裁許茂御座候儀ニ付、如何可申渡候哉、御問合
 以使者申入候、

十一月十二日

秋元撰津守使者

朝倉唯七

御附札

先裁許有之候場所之立木之事ニ付、未木枝葉等社中立会売払、代
 金社中修覆料ニ相遣ひ、成就院一存ニ而取計間敷旨、御申渡相濟
 不申候ハ、拙者方江御差出可有之候、

四三

寛政九丁巳年五月、万年三左衛門様御答書、長谷堂村地元字二つ森
 山江入会候御料仁位田村ニ而、松木伐採候一件存寄左ニ得御意候、

一仁位田村合役永を支配役所江相納候者、不相当ニ御座候得共、御
 料ニ相成候節之引付ニ候上者、今更致方ハ無之外ニも随分右躰之

類多有之ものニ御座候、

一立木を不為伐採停止木と申ニ申付候事ハ、有之間敷哉、領主林ニ茂無之、殊ニ他村入会之山野ニ候得者、旁停止木ト申付候事ハ、如何ニ可有御座候、然共、柏倉江停止木之趣、一旦御掛合も有之事ニ候得者、今更勝手次第共難被仰付事ニ奉存候間、此上停止木ト申事を、強而御懸合等無之方ト御心得被置候迄ニ而可然奉存候、一仁位田村入会山之役永者、一ヶ年何程宛相納候哉、右役永者何と申名目ニ而相納候哉之段、柏倉役所江一応御問合被成候上、外入会村ハ少分ニ候ハ、其趣を以立木差綺サキ可申謂無之段、仁位田村江御申渡候様、御掛合可被成候、縦者

長谷堂村入会山

一銀何匁

野永

右之通、割付ニ認有之候得者、秣・下草計之入会也、

同断

一銀何匁

山永

右之通、有之候得者、薪・秣之入会也、

同断

一銀何匁

草山永

右之通候得者、秣計也、

三色之内、山永ト有之候ハ、立木も入会伐苅可致事ニ候間、立木差綺筋ニ者無之間者難申付候、外式色之名目ニ候得者、鎌苅等之外立木を可差綺筋ニ者無之間、懸合不相当ニ者無之候、

一勿論立木迄も入会ニ候共、目立候川除杭木ニ可相成品、伐採候ハ、地元其外入会之村方江も及熟談候上可伐採者、格別之事ニ候処、支配役所江役永相納候迎、地元へも不懸相談、立木伐採候者甚不埒ニ御座候得共、柏倉江指出書付之趣ニ而者、不調法至極之段申立候事ニ付、今般之儀者不省いたし候様、長谷堂村江御申渡、伐取候木品者同村江御渡以来、立木差綺間敷旨、堅申付有之様致度段、柏倉役所江御掛合可被成候、

一仁位田村之書付之内ニ、立木之分伐採自由被成候様相願度候得共、入組候間願筋之義者、先差扣可申、何卒以来松木立ニ不被仰付様ニ御取計被下度旨有之候間、其所を以、以来木数不相増様可申付候ニ付、是迄之立木者、決而差綺間敷旨、仁位田村江申渡有之様致度与、是又柏倉江御掛合被成候方可宜、仁位田村強而相願候迎、今般伐払ニ者決而及間敷、実ニ草立薄致難義候ハ、外入合カ村ニも可相願筋、地元迎も同様之事ニ候得者、難義ニ可相成由之處、仁位田村申分難立事与奉存候、役永 公儀江上納いたし候ニも、元か長谷堂村地元山之儀ニ候得者、伐払者難被仰付旨、御達有之振之筋者有之間敷奉存候、尚御勘弁御取計可成候、

但、山役永之名目ニ候ハ、薪迄も入会野役・草永杯与有之候ハ、鎌苅計之入会ニ御取極被成候而も、苦苅間敷奉存候、

五月

四四 同年同月、御同人様御答書、

是者、上町藤七弟忠七、乱心ニ而一間取拵差置候処、忠七居リ候

間合出火焼死候ニ付、江戸ニ而御問合有之、其御答書也、

御書面、忠七焼死之儀、不及是非義、老父母背負出候程之義ニ候

上ハ、藤七夫婦不屈之筋も有之間敷、隣家并居町等之親類・五人

組御糺シ成、藤七申候無相違旨申立候ハ、忠七焼死之儀ニ付

而者、不屈之筋も不相聞候間、無構旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

但、家数拾軒焼失有之候上者、定而入寺等いたし相慎被在候

義与奉存候、同数十五日程も相立候ハ、入寺御免可被成候、

若入寺茂不致候ハ、日数十五日も慎被仰渡可然奉存候、是

則、武家之出火遠慮之趣意ニ御座候事、尤、類焼家数ニ而慎

日数長短有之候ハ、町立之事ニ候、武家多分日数七日也、

五月

四五

一秋元但馬守領分武州入間郡柏原村永代寺屋根普請仕候ニ付、去月

六日、同州同郡田中村小笠原太郎左衛門様御領地江、萱調ニ罷越、

右萱調候上引取候節、人足之者参候内、久右衛門ト申者、繩ニ而

候萱之下ニ、風呂敷包壺ツ有之候、依之人足共立寄見候に、売

主新右衛門と申者江、風呂敷包相渡可申候間、請取候様申候処、

不存物故請取候義難相成旨申聞候ニ付、無拋持参仕罷帰、村役人

江申立候處、別紙之品ニ御座候段申越候、如何取計可申哉、御内々
奉伺候、以上、

附札

御書面、風呂敷包之儀、別紙為御見有之候、書付之趣ニ而者、風
呂敷包之内、衣類小柄計、麻袋等有之外ニ、鍛冶屋七右衛門宛
ニ而、松平大和守内神東勇藏与認有之候間、大和守家来江御掛ケ
合之處、勇藏者大和守足輕ニ而、右勇藏合善光寺後町鍛冶屋七右
衛門方江之書状壺封、入溝村与兵衛与申者江相預遣候由、右之外
何ニ而も頼遣候品無之旨申越候趣相見江、左候得者入溝村与兵衛
所持之風呂敷包取落シ候欵、又者被盜取候義も可有之哉、与兵衛
相尋候ハ相分り可申處、御書面ニ而者入溝村者誰領分知行共相知
不申候間、入溝村之領主地頭御糺、其領主坎地頭江御掛ケ合、与
兵衛御聞糺、其訊御申聞候者、猶又可及御挨拶候、被遣候書付式
通致返却候、

六月

一糸入鳴古綿入

一木綿古裕

一小柄

一針

一麻袋

右、麻風呂敷包ニ有之候外ニ

一書状

秋元但馬守家来
八木源左衛門

壺

壺

壺本

壺本

壺ツ

壺封

上書、鍛冶屋七右衛門様 神東勇藏卜認、裏武州川越松平大和守
内と有之、
右之通御座候、以上、

六月八日

卷上

桑原伊予守内

八木源左衛門殿

藤田弥左衛門

以手紙致啓上候、不正之天氣相御座候得共、弥御安泰被成御勤珍
重奉存候、然者此間被遣候御問合書御挨拶之趣、致附札進達被仕
候、尤、右御附札ニ申上候通、入溝村与兵衛支配地頭之處、松平
大和守様へ御掛合御聞糺不被成候哉、但、入溝村与兵衛与計ニ而
国所支配地頭茂相分リ不申儀ニ御座候哉、其段被仰越候様奉存候、
未御糺不被成候ハ、御糺被成候上ニ而、尚又私方迄被仰付候様
奉存候、其節猶又取調御挨拶可申上候、右之段可得其意、如此御
座候、以上、

六月十日

四六

寛政元酉年

御勘定奉行根岸肥前守様江御問合御附札、

一秋元但馬守領分武州入間郡三谷村上分百姓幸七と申者宅江、去月
十六日夜八ツ時頃、盜賊大勢拔身を持押込候處、幸七義、忍出声
立候得者、村方之者集リ候内、盜賊大驚、早速何方江欵逃去、忝

人茂捕不申、行衛相知不申候、尤、幸七義、何品ニ而茂被盜賊不
申、怪家人等も無御座候處、右盜賊共取落候鼻紙袋一ツ、左之通
ニ御座候、

一萌黄羅紗古キ鼻紙袋一ツ

内

一小口 壹本

一鑿 壹本

一印形 壹

一鼻紙 少々

一反魂丹 壹貼

一楊枝 式本

一故菽 少々 其外書付三品有之

右之通、取落シ置申候、然處、牧野内匠様御知行所同州比企郡平
村全長寺江盜賊押入、少々紛失之品有之内、右鼻紙袋、幸七宅へ
盜賊共取落置候沙汰及承、村役人共罷越掛合候ニ付、取落候品為
申聞候處、右之内、小刀壹本・鑿壹本、右両品者心当リ無之候得
共、其外之品ニ者心当リ之品ニ御座候間、差返呉候様申聞候由、
尤、右品之内ニ全長寺と申紙面も有之由、右品者領(主)役所江取
揚置候旨、且、前書ニ盜賊之手掛リ無御座候段、領分役人共申
越候、右之品、如何取計可申哉、御内々御問合申上候、

附札

御書面、盜賊取落置候品、全長寺被盜賊候ニ無相違候者、全長寺
江村役人ハ相渡書付取差出候様御申渡、小刀・鑿者全長寺心当リ
無之旨申候上ハ御取揚置、盜賊之手掛相知次第可訴出旨、村役人
江御申渡可然哉ニ存候、為御見被成候書付六通、致返却候、以上、

西十月

秋元但馬守家来
安館門蔵

十月二日

四七

寛政八酉辰年四月

一山形御困米を以夫食御手当之義ニ付、御用番戸田采女正様江御
窺、并御附札左之通り、

但、右御困米者、寛政元年ニ被仰出候壹万石ニ付、五拾石之
御困米之方也、

私在所羽州山形、去寅秋、俄之冷氣ニ而田畑共ニ不作仕、百姓共
難儀仕候、手当等仕候得共、米穀払底、其上価高直ニ而、城下町
在迄甚難儀仕候、城下之儀者、町家多御座候故、連年他領之米穀
夥敷入込、右を以相くらし候処、去秋今近領茂凶作ニ而穀留等有
之、此節別而難儀仕候ニ付、猶又手当申付候得共、当夏今出来、
秋迄之處、夫食必至与差支、品ニ寄及飢餓候程之儀ニ茂相成可申
哉と、追々在所家来共今申越、心痛仕候、猶又、手当者可申付候
得共、右之仕合ニ御座候得者、万一手当不行届、領内飢餓之者出
来仕候而者、迷惑仕候ニ付、此上弥米穀払底領内之者共難儀仕、
手当等不行届候節者、不苦儀ニも御坐候ハ、先達而被 仰出候
困米を以手当仕、当秋收納ニ而詰替置候様仕度奉存候、遠国之儀
差掛リ候而者取計難儀仕候間、此段奉伺候、以上、

四月十七日

秋元但馬守

附札

困米之内、半石迄者夫食手当ニいたし候而も不苦候、尤、右之分、
当秋收納ニ而詰替置候様可被致候、

四八

寛政九巳年

明善寺今成就院江詞堂金貸付、返済滞出入ニ付、寺社御奉行板倉
周防守様江御問合御附札左之通、

秋元但馬守領分羽州山形城下小姓町明善寺今、同所両所宮別当成
就院へ相掛リ貸金出入訴出候ニ付、吟味仕候處、成就院先住之借
用金ニ而、先住致死失、後住可引受筋ニ無之段相答、証文江奥印
いたし候役僧呼出候處、兩人共ニ相果、尾形秀藏者存命ニ罷在候
間、同人呼出相糺候處、先住盛音私用ニ借受候金子ニ候旨申立候
間、証文相糺候得者、自寺要用ニ付、借用仕候返済之義者、寺料
年貢取米を以相済可申段相認、借主成就院請人明見寺村妙觀院世
話、来呼院連印ニ而、右之通、無相違年貢米払、代金を以返済可
致旨、奥書ニ認、役僧兩人并前書尾形秀藏印形有之候ニ付、証文
ニ自寺要用と有之上者、寺用ニ借受候金子後住济方可致筋之段申
聞候處、真言一派之掟ニ而、先住之借財、後住引請ニ者難致旨申
立候間、請人妙觀院相糺候ハ、可相分儀与奉存候處、同寺之御料
所村方之寺院故難呼出、右之仕合ニ付於領主難相糺旨申聞、願書
差戻候得者、添筒願出申候ニ付、則添筒を以先達而當 御奉行所

江差出申候處、一領之出入ニ付御取揚無之、訴状者御差戻ニ相成、猶又願書差出申候、右之通証人御料所之寺院故難相糺、決着候哉
 二者御座候得共、縦令私用之借用ニ候段申立候得共、証人之申口而已ニ而証文^(虫損)□面を捨、吟味詰候ニも有之間敷哉、然上者、証人ニ不拘、先住之借財、後住之^(マ、マ)後住之引受ニ者不致、真言一派之掟候とも、自寺要用ニ付致借用候段認有之候上、右申分者難相用候旨申聞、証文之面を以、成就院江濟方申付候積リ、吟味詰候而茂振レ候筋者御座有間敷候哉、御問合申上候、以上、

巳五月

秋元但馬守家来
安館門蔵

御附札

書面賃金出入証文吟味之上、寺用ニ借受候段無相違上ハ、証文不及相糺候ニ、尤、先住之借金、後住引請不申、真言一派之掟ニ候共、他宗与及出入候節、一派之掟者難相用候間、後住へ濟方御申付有之相当と存候、

七月

四九

寛政九丁巳年九月、借金銀出入、是迄之分者取揚無之旨、從 公儀御触有之候ニ付、御問合左之通、

小田切土佐守様御用人中西仙左衛門へ御問合附札相濟、

一・二・三ヶ村百姓連印立、家并田畑出入借金銀、

御附札

通例之借金銀同様之取扱ニ相成可申候、乍併、出入之始末ニ寄、吟味ニ茂可相成哉差極、治定之儀者難及御挨拶候、

一質地小作証文を以、百姓連印、尤、田畑名寄帳写差入置、借入金銀、

御附札

質地者何ヶ年立候而も相立申候御書面之趣ニ而者、引当之様ニも相聞申候、左候得者、前条同断之義ニ奉存候、

一田畑家屋敷等書入一通リ、百姓数人引請ニ而借入金銀、

御附札

「通例之借入金銀同断之取扱ニ而及出訴ニ候而も、取上無之候、一大坂町人共ハ、公銀之名目ニ而借入金銀、

此類之名目銀者及出訴ニ候得者、御取上可有之候、

右之分、此度被 仰出ニ而出訴之上、御取揚有無之義、

但、京・大坂共取扱不連申候事者無之哉之義、

御附札

京・大坂共ニ其外一流之被 仰出ニ而、武家等江懸リ候義者不連候儀者無之候得共、彼地之百姓・町人同土之出入、彼地限之御取扱

振合有之義ニ付、御当地之取扱と者違ひ候儀茂可有之哉、其所者

差定リ候而難及御挨拶候、

右之儀共、兼而相心得申度御問合申候、御附札ニ而被仰知可下候、

十月朔日

阿部播磨守家来
長尾伝兵衛

小田切土佐守様江佐和右衛門召出御頼、御用人金子源左衛門呼出、左之書付指出、御附札ニ而被仰下候様致度旨申出候処、面書之趣者、大躰差定リ候処候得者、土佐守様御在宿も候間、内々伺具可申旨ニ而監有之、源左衛門被在挨拶之趣共、左之通、

覚

一大坂町人〆借用金銀、從 公儀御貸附金、

一從 公儀之御詞堂金、

一御納戸御用代金、

一初藏御貸附金、

一家中物成切米引当借用金、

右ヶ条、名目証文ニ而借用之分ニ而も、此度被 仰出候御書付以前之分者、及公訴候而も御取上者御座有間敷候哉、為心得御問答申上候、以上、

九月廿六日

牧野日向守家来

落合佐和右衛門

御附札無之、口上ニ而源左衛門申聞候趣、

「右箇条之内、詞堂金者訳柄ニも可寄、寺社御奉行江可問合候、家中物成切米引当、借用者御取上ニ相成間敷、其外箇条之分者不殘是迄之通、以前之方も御取揚ニ相成可申旨申聞候、

武家〆町家江預金いたし、利分取来申候、然処、此度被 仰出候御書付、以前之預金ニ而相滞及 公訴候節者、御取上御裁許被 仰付候義も御座候哉、此段御問合申上候、以上、

九月廿六日

牧野日向守家来

落合佐和右衛門

御附札無之、口上ニ而源左衛門被申聞候趣、

「武家〆町家江預金相滞及 公訴候得者、是迄者御取揚早々済方被仰付候事ニ候処、此度被仰出候御書付ニ付而者、及 公訴候而も御糺之上、封金、或盤箱入等之類ニ而、其金子之俣相預ヶ置候義、慥成者格別一通之預金ニ而、於御奉行所ニ御糺之上、証文面に利分之儀書付無之候共、預主〆利分指来候儀申出相違無之候得者、貸借之金子ニ准シ御取揚、御裁許者無之相对ニ可致之段被 仰渡、御指戻ニ相成可申旨申聞候、

御改正ニ付、是迄之通取上候分、

一 地代・店賃損料之品、家質、船床・髮結床・出入奉公人給金滞之分、質地を以借候金銀・為替金并質地買預米之類、

一 公儀御貸附金者勿論、堂上方・宮方、其外重キ寺社御手当貸附金、并道中宿方助成金貸附、

右之方、御改正御書付以前々々ニ而も、取上済方可申付候事、

安藤对馬守様、御直ニ三奉行所江御渡被成候写、

右之通ニ候間、此趣を以御領分〆申出候出入茂取計候様、文左衛門・左七方〆申来ル、

一 遠国之分、御預所御代官ニ而切金取遣リ為致置候分者、於彼地御書付之趣申渡、御預所役人・御代官、日限証文取上候事、

一 家質、船床・髮結床・出入奉公人給金慥成質物地代滞、店賃銀滞、為替金・質地買預米等之類者、御触以前之分ニ而も取上候事、

但、質地并買預リ米等吟味之上、事実を糺可及沙汰候事、

一以後出訴之方、当八月晦日迄貸借之方者不取上、九月朔日迄之貸借出訴之方、取上可申事、

一公儀御貸附金者勿論、堂上方・宮方・其外重キ寺社御手当貸附、道中宿方助成金之分者、書附以前^二而も取上、濟方可申付事、

但、右名目を以、自分之金子差加へ、貸附候杯之儀者、事實巨細^二吟味之上可取計、

一是迄濟方申付候分、右証文者取上置故、金主^二証拠無之間、以来相对濟申付、証文書替可申義之処、借方^二而書替難渋申候旨、貸方^二出訴之方取上糺候事、

但、書替候共、当九月之月附者不致、古借之方^二立候方之事、

已十月、根岸肥前守様江御問合御附札、

此度金銀出入之儀、是迄之分者御奉行所^二而御取揚無御座候旨御觸御座候、右^二付、御内々御問合申上候、譬者百姓、先祖^二所持之名田質入^二いたし、金子借用仕候処、右之金子相滞候而出訴等仕候而も御取上無御座儀^二可有御坐候哉、

御附札

〔御書面、出訴致候得者、矢張是迄之通取揚申候、

一領分村方収納を書入^二致、村証文^二以借用仕候類之儀出訴仕候而も、御取上者無御座儀^二可有御座哉、此等之趣、御内々御問合申上候、以上、

御附札

〔御書面之類者、訴出証文糺之上、其始末^二寄候事^二付、兼而治定之難及御挨拶^二候、

已十月

十月十二日

大久保安雲守家来
早川与左衛門

五〇

寛政十^{戊午}年三月、寺社御奉行、

板倉周防守様江御問合、左之通、

但馬守在所
羽州村山郡山形城下鉄砲町
御朱印地天台宗

宝光院

右寺^二、前々^二三拾^三所札所之觀世音御座候處、古来^二堂も無之、本堂之内^二有之様、参詣之者も早速相尋兼申候^二付、此度右寺之境内江唐銅^二而濡仏鑄立、丈壹丈余之座像建立仕、右有来之觀世音腹籠^二仕度之旨願出申候、領主^二而承届候而も不苦筋^二可有御座候哉、此段御問合申上候、以上、

三月七日

秋元但馬守家来
安館門蔵

寺社御奉行板倉周防守様江、御留守居御問合候處、今日御呼出、寺社役を以被仰聞候者、右濡仏腹籠^二觀音を致候事者、天台一派之宗^二而致候事^二候哉、当所^二杯^二而右様之願等者無之事^二候間、先格宗^二右様之儀致候事^二候哉、得与御糺之上、猶又可申上旨、上野執当御呼出御尋も可有之候得共、若、宝光院致迷惑候而者如

何ニ付、同院比方迄も相糺、夫共達而相願度段申出候ハ、右糺書相添、濡仏者何之像ニ候哉、其段も相認願出候様可取計旨、且、参詣之人不存候ハ、門前ニ柱を建書付置候者、夫ニ而可相濟哉之段、御口上を以被仰聞候、

但、腹籠ニ致、後世如何之儀茂可有之哉、御沙汰之由ニ而候、

五一

享保五子年十二月

一伊賀守領分百姓欠落仕候者御座候、右之者御当地町人ニも買掛リ有之、其外領内家屋敷・田地・諸道具書人之借金・借米等有之候、依之跡之義申付様、御内意奉伺候、

一右之者尋申付候哉之事、但、尋申付候得共、親類并所之者ニ可申付哉之事、

附札

「尋之儀、親類并所之者江申付候事、但、尋之義申付候共、其分ニ仕候共、地頭心次第、

一家屋敷・家財・田地等者、欠落ニ申付候哉之事、

附札

「欠落者、田地・家屋敷・家財者、不残取上候事、

一家屋敷・家財・田地・諸道具借金之方江、分散申付候哉之事、

附札

「欠落者、跡借金買掛リ者、分散ニ不及候事、

一但、分散申付候得者、質物出入有之分者、其品相渡申候事ニ候哉、質物有之茂無之も、一同ニ引平均ニ而分散申付候哉之事、

質物有之借金之方江、其品相渡候而者、其外江之分散之品少罷成候、

附札

「欠落者之所持之田畑、名主・組頭之加判ニ而質地ニ入置候ハ、金主借候者江本金相渡可申事、

但、田畑・屋敷其品者相渡不申払候而、本金ニ而貸主へ相渡申候、払候而借金高分過有之候得者、過候分取上、不足ニ候得者、不足之通ニ相渡申候、

一妻子并近親類有之候得者、家屋敷・家財・田地・諸道具為取借金、又者買掛リ者相对次第と申付候哉之事、

附札

「欠落者妻之道具者被下置候事、但、子ニ者不被下置候事、

欠落者、妻子并近親類有之、地頭之了簡を以、右之家屋敷・家財・田地被下置跡百姓為相勤候共、欠落者之跡相続と申ニ而者無之、別段ニ百姓ニ罷成候事、

欠落者之跡家敷・田地等、右欠落者之親類内江預百姓為勤、年貢等納させ候義者、地頭了簡次第之事、

一御当地之者ニ買掛リ御座候領内とハ、申付様格別ニ可有御座哉、後々出入ニ罷成様仕度奉存候事、

附札

御当地買掛預金等、以来申来候共、本人欠落ニ付、跡設快之上者、
取上不申候、

一無尽金者取上不申候由承申候、弥其通り御座候哉之事、

附札

〔沙汰不及候由之事、

十二月廿一日

秋元伊賀守家来
世古甚八

昨廿一日、中山出雲守様江参上内与力山田新兵衛江対談仕申聞候者、川越仙波新田酒屋理兵衛与申者、所を欠落いたし候、依之跡申付様、御当地御仕置之趣を以可申付候、以後共ヶ様之類有之節申付様之品承置申度旨申達之候、出雲守様江相伺候上ニ而可被申聞由ニ而罷帰候、今日参上仕候処、出雲守様江被申上候由、書付并附札等差出申候、

一分散者、本人罷在候上之儀ニ御座候由、

一新兵衛被申聞候者、欠落者之跡設取之儀者、御当地ニ而者三十日程候之間を置候而被 仰付候、御在所方ニ而者、猶日数多被差上設収被仰付可然之旨、被申聞候、以上、

《Summary》

A Reprint of Historical Document by the Akimoto Family
Kohen Otoiawase Otsukefuda in the Possession
of Tatebayashi City Library

By Naomi KANZAKI

The historical document reprinted here is “*Kohen Otoiawase Otsukefuda*” by the Akimoto family in the possession of Tatebayashi City Library (collection nos.: 4, 3 and 17). This is related to “*Kohen Otoiawase*” in the possession of Tohoku University Library included in “*Ometsuke Mondo — Machibugyosho Toiawase Aisatsudome — Kohen Otoiawase*” which I released from Sobunsha in February 2010. “*Kohen Otoiawase Otsukefuda*” has a possibility that another part written about “*Machibugyo*” might exist. So the full text of “*Kohen Otoiawase Otsukefuda*” was reprinted.

Keywords: *Kohen Otoiawase Otsukefuda*, Tatebayashi City Library, Akimoto family